

常磐松文庫蔵 『九条家本源氏物語聞書』 翻刻(一)

渡邊道子・徳岡涼
葛原由可・松原哲子

凡 例

一、本翻刻は、本学常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』（五冊）のうち、第二冊目の「賢木」〜「玉鬢」について、可能な限り原本の様態を復元し得るように翻字することを目的とする。

二、右の目的を果たすために、翻刻の際には次の基準を設けた。

1、改行は原本に従う。半丁毎に「印を付してその下の（ ）印内に、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付記する。但し表紙・見返し・前遊紙の場合は、その旨を」印下の（ ）印内に記載し、丁数には含めない。

2、本文・書き入れ注共に全て原本に忠実に翻字した。猶、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。

3、一応現行の字体に翻刻するが、異体字を残したところもある。又、意識して片仮名表記がなされていると思わ

れる部分に關しては、片仮名表記を残すこととした。

4、見せ消、合点、濁点その他の諸記号は、可能な限り、原態に即して表記することを原則とした。また頭注・傍注・脚注等の書入れが二行以上にわたっても、そのまま忠実に再現する。

5、紙片貼付の箇所には□印、また注記・補記すべき箇所については○印を用い、下の欄外にその旨を記した。

三、各巻の礎稿の担当は次の通りである。

賢木・花散里・須磨・明石（徳岡）

滯標・松風・薄雲・槿・乙女・胡蝶（渡邊）

蓬生・関屋・絵合（松原）

玉鬘（葛原）

(外題なし)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

賢木

以詞乃哥為卷名也

心ときめき—— 世間にも葵ノ後は御息所本妻ニなり

給はんと思也 宮の中ニもとは野々宮也

親そひてくたり—— 筓花ニ委し 徽子女御ノ事ヲ

引ヲ 神前の哥仙ニ齋宮ノ女御トあるは是也琴の音に

峯の松かせ——ノ作者

御そうそこ—— 文ニ限す使はかりをいふ也

なるへし 草子の地なり

院の上—— 此御煩にて終ニ崩御也

むげに 無下 したのなき事也 極りたる義

たいめいと かやうニ書てあれ共たいめんと読給へり

そのこと々も聞わかれぬ—— 琴をかくし題ニして云り

あたりく—— そこく也 当此字也

御せうそこ—— 御案内也

いさやこ々の—— 御息所の心中

たけからねは 心つよからぬ也

こなたはすのこ—— こなたとは爰はなり潔斎ニ苦し

かるましいと源の御詞也

(表紙)

(見返し)

(前遊紙オ)

(前遊紙ウ)

(一オ)

第一丁右肩ニ「九条」(單郭朱方印)、右下隅ニ「実践女子大学図書館」(單郭朱長円印)ヲ捺ス。

下ニ擦り消シノ痕有。

榊をおりて 手持わるきニよりて也 てうしのなざニ也

かはらぬ色を—— 御息ノ心にとゆる也

しるしの杉も—— 三輪ノ古事也 杉はなきにと也

人もしたひさまに—— 御息ところ也

いかにそやも そ文字清ム

きす^{キス}ありて—— 物のけの後也物のけと成給事也

つらさも消ぬへし 無限心中不平事一霄清話又成空

三休是を引給り

やう／＼——されはよと心うごきて—— おもひ切たるを心動

きておほしみたるゝ也されは忍を付て見よ

うけはりたる りうんしたる也 暁のわかれば—— 実なき別なれば此やうなるわかれば

何共かとも合點ゆかぬ事そと也 又一説花鳥ニ

こともゆかぬにや いふもいはれぬ也

なみたくみ給へり 巴校合某か本ニは如此也 也足被仰はなみた

くみあへりと可然よし也如何／＼

いひつゝけ給べかんめれば 齋宮 伊勢ノ齋宮は帝一代ニ一度つゝかはり給ふ也是ニ

よりて不吉ノ例也賀茂のは其身ノ御けかれ次第^ニおり

國かはりつゝ帰る都路^巴ふり捨て 鈴香山^{三光院殿} 給也

かけまくもかしこきおまへに のつとうなんと初ニ此詞あり

仍爰ニ書り

やしまもる—— 諸神ノ事也説ゝあれ共先以一往此分なり

┌ (1ウ)

┌ (2オ)

本文料紙ヲ用イテ付箋ヲ貼付。
本行ト同筆。

宮の御は 宮の御哥はと云事也

女別当して 齋宮の女別当なり官也 皇嘉門院の

別当なと云類也

卅にて みそちにてと読給り此時御息所も同輿にて内へ

参給り是は葱花とて鳳輦にてはなく葱ヒトモシのたうをかね

にてうちたるを御輿のむねにすゆる也猶くはしき事は花

鳥ニしるせり 葱花はギほウしユなり

いだし車 前ニ注ス

哥 そのかみを今日はかけしと しもし濁ル

哥 袖はぬれしや

八十瀬のなみにぬれクすズ ぬれつ又つれず

ことそぎて そさうなる義也

東宮の御事を返ク 桐壺の御遺言ニ朱雀院の

次かならず此東宮にと也是冷泉院か

女のまなふへき 式ノか詞也かな書の物にて女の

申へき事ニあらず少し申さへ恐かましい事也と卑下也

桐壺帝を高祖ニ比シ 大后キを呂公ニ比シ 朱雀を惠帝ニ比ス

おほちおとト 大きさきの御父の大臣なり

哥 そこのみこたちの 源の御事也

陰ひろみ かけひろみとは松の様也

あまりわかクしうそあるや あまり年もないと也

ちもく 正月ニある事也然るへき人に官を成るト事也

虫蝕。

「 (3才)

「 (2ウ)

とのゐものゝふくろ 三ヶの大夏の一也

みくしげ殿 内侍ノかみ也 誰共なし

かむの君 朧月夜の内侍也

弘徽殿 今は内侍のかみ住給へり是より己前は登花殿ニ

おはせり

こ姫君を引よきて 朱雀を引よきて也

いたづきこえ給ふ事—— 左大臣の源しをいたづき

給ふ也いたづくとはかしづく事也

いとのとやかにいまほしき—— しもあらま よき程に有度と也

むかひばらのかきりなく—— むかひばらとは紫ノ継母也其女也

物語にこと更につくり出たる—— 式ワカか詞也草子ニ云る也

齋院は御ふくにて—— 女三宮の替ニ物語の姫君かはり

給り

昔にかはる御ありさま——めり 源氏の御身ノ上

御す法

つゝしみ—— 御門御精進の事也

朝夕に見奉るさへ—— 源の御夏也

女の御さまも—— 朧の御事也

はらぎたなき 意旨わろきなり

あくとをしふる 明日と人にあくと云事を兼たり

とう宮をみ奉り給はぬを—— 東宮は常ニ大裏ニおはしませは也

ぬりごめ 土蔵のやうなるもの也

大夫

「(3ウ)

「(4オ)

宮もまかッて給 兵部卿ノ宮なり

からうして やうくとしてといふかことし

くだ物 橘などにてあるへし又かれ是也

見だにむき給へかし 見むき給へなり

^哥あふ事の—— ^哥いきてよもあすまての哥を引給り

ななき世の恨を——あたと—— 我とわか身をあた

とするへしと源ニ仰らるゝ也

うち東宮にも—— 御両所也

この女きみ 紫上也

み心をき給ん事 疎略の義也

いて入給にも 門の出入なり

式下かやうに 式部と云老女こそ有つらん不知く

まめだちて 実目ニ成て也

御はのすこしくちて—— 齒のちぐちたる也

玉のきずにおぼさるゝ あまり源しニ似奉て人の推

量せんか瑕と也

思ひしるさまにもみせたてまつらんと—— くらさむの心也

さへあるかぎり—— 才智なり

からくくと 花皿の音也

ゆきはなれぬへくやと心み侍る 世をそむく試也

浅茅か露にかゝるさゝかに 紫上わか身をさゝかにゝ比して

よみ給へり源氏より外ニ頼人なきとの心也

かく旅のそらになん—— 齋院ゆへの物おもひのやうニ云なし
給り

「(4ウ)

「(5オ)

「(5ウ)

下ニ擦り消シノ痕有。

哥
かけまくもかしこけれとも—— かけて申は恐かまし

けれともと也

かうくしう 神くしう

そのかみやいかは—— 何事か有つる何事もあるましいと也

朝顔もねびまさり—— 齋院ヲ指して云リ御かほ也

やうの物 同し様のものといふ事也

院もかくなへてならぬ—— 此院と申は齋院なるへし齋院

を哥連歌には齋の宮トする齋宮も齋院も宮にておはし

けるによりて也又院とは云かたき故ニてもあり

すこしあひなき事なりかし 草子の地也

御す行いかめしう—— 御布施の事也

くろき御車 むしろつゝみニして黒キ車也

女君は日ころのほとに 紫上也

色かはると有しも—— 前によめる紫上ノ哥ニ色かはる

浅ちか露とあり 時のおほえなと替る心尤なる物也

宮のあひだの事—— 東宮ノ御支也

にしきくらうおもひ給ふれば 古今ニみる人もなくて

朽ぬる奥山の紅葉は夜の錦也けり 伊駒山いさむる嶺ニ

ある雲のうきて思ひのはるゝまもなし 伊駒山雲なかくしそ

とある古歌を以テ読給り 此等ニ同し

なごやか 和らか也

すきくしき—— 好色めきたる事也

中宮のこよひまかて—— 春宮より也

何事もはかくし 朱雀卑下の御詞なり

┌ (6才)

┌ (6ウ)

世にあひはなやかなるわかひとなり 御 りまひ也 ワカワド 若人

と読へし

白虹—— 弁の欺て云る詞也すえとをるましとて太

子おぢたり師説如花鳥 勿論太子もおちたり

かはれる事おほくかなし—— 前々ニ替也

九重に霧やへたつる—— 藤壺の御作也

月影は—— 面ニはさもなければと底心は藤つほを恨ル心あり

かすみも人のとが 引哥河海ニアリ

宮はとうくうを 宮とは藤壺也

木からしの——かむの君のかた也六条ノ御息ト此かたは

一段心ある人也さるニよりて昏筆等も撰て書給也

きこえさせても—— 文章なり

あひみすて すもし濁るへし

院の御はて 一周忌ノ事也

ゆきあふほとを—— 雪を兼テよめり

すちかはり—— 御手一かともなくして見事也

人にはことに 異ニ也人よりすくれたり

十二月十日より 十二月十日より 此事不審崩御へ 去年十月十日

ころ也 也足御口如此

御國忌 こもし清給り 世間ニ常ニ云は濁ル如何々々

ぢす 軼。此字也 文卷の事也 河海にくはし

先帝の御れう 中宮ノ父の御支

五卷の日 五の卷とはよます 此日は中日也賞翫也

虫損。「御はしりまひ也」カ。

「(7オ)

「(7ウ)

たきゝこる 採薪及菓餌隨時恭敬焉 八講ニ此文に

ふしを付てめてらるゝ事あり号ノ薪のぎやうだうと
いふ也

常におなしことのやうなれと—— 筆者の語也細々

源しをほめ申やうなれともと云事也

みこはなかはに 兵部卿ノ宮なり

御前ニまゐり給へる 簾外なるへし

いま初めて—— 崩御の時から思泣給ふと也

みやうがう 名香 又の説は名行 是は焼作法なり

心をさまらぬ—— 本心ならぬ事

月のすむ—— 心は花鳥に明白也 弄花の義猶以よし

師説猶切利天までしたふ共此世のやみにまよはんと也月の

すむ——は切利天也すむニ迷と当りたる作意也切利天は

御出家の事ニ云り 弄ニ委シ

大かたの—— 藤つほの御哥也 源氏の仰らるゝ様なる道心にては

なきと御卑下なり

かたへは—— 地なり

世のうさに 太后なとかうきと也

くはしう—— 地なり 筆者の詞也

六かしかりし—— 源しのなまめぎ給るをはなるゝ也

くしいたげに 苦シ又は窟シ也 痛イタゲ

あを馬はかりそ—— 白馬へ中宮へも引

むかひの。とのゝ 大后の御父也院の向ニある歟

┌ (8才)

下ニ擦り消シノ痕有。

┌ (8ウ)

むへも心あると——音に聞奏かうら嶋けふそみるむへも

心ある海士はすみけり 此哥の心也 西院ニ齋院の御座ある

時の事也是ニよく似たる事なれば式日一段力を入れて書

たるとみえけりむかしは先人皆々大やうニ見立られたり

如何々々 仁明の後の御出家の支也淳和の御女なり

ありし世の——誰も問人はなきにと也

さもたくひなく——一ツものにて 源の御事也

つかさめし 除目の惣名也

宮の御たまはり 何もくるしからず 但也是はたらばりとよみ 給り

人しれすあやしう——源と密々の事を女院の思召也

此殿の人とも々 源氏の御内の人々也

ちどのへう 出仕を止^マ官をかへす事也 致仕表七十已後の事

御ことも 物くるをしきまで—— 狂の字

ましてことはり——源氏さへなりまして我はと云心也

御と経をはさるものにて それはさう有て也

やうくいひ出る—— 余りニ随意なる御遣退^ト云はやらか

ふとの 書籍を置所也 文殿欵 す也

殿上人も大かくのも 大学のもととは詩人也

こまどりて—— 一ませに左右ニ居^ル是^ラこまとると云也

さるへき事にて—— 先世の事にてと也

それもかとけさ—— 源氏を花にたとへて也

時ならて—— 卑下の御歌也 時ニあはぬとなり

┌ (9ウ)

┌ (9オ)

らうがはしく 乱かはしく也

貫之かいさめし—— 本書不知

成王の何とか—— 筆者の作也源しノ御子共又は桐壺

の帝の御子共申かたひと

すほう

きさいの宮も—— 大きききの支也

宮つかさ—— 内侍ノかみのにても有へし又は大后ノにても有へし

先みやの御方に 弘徽殿なり

中将みやのすけ かの君の皆ノ兄弟なるへし

したどに 舌早なる事也

左のおとこの—— 源氏の御心中ニ評也おかしう思召也

うち見かへりて 臈の君のみかへりて也

なくさめきこえ給 当座ののべく也

齋めんをも 槿なり
いうそく—— 物しり也

うたかひ侍らさりつるなどの給ふに 是迄は右大臣の詞也

又此きみをも 臈ノ君

ねたげなりし人—— 世間ニ何かと思ひつる人とも
事也

すぐくしう

(以下九行分空白)

追

御まへには 齋院をさして云也

まぎるゝ事なくて—— 中将返事の文言欵

┌ (10才)

┌ (10ウ)

┌ (11才)

御心には深うしまざるべし

せめてかへさひ申給て イ しゐて御返しある也

御れう 御ため也

さても見んと——心もとゝめす 本妻ニ用イ給かとおもへはさもなし

月も入ぬるにやあはれなる空をなかめつゝ 私員五天到日

——月落—— 是ヲ曳度処也

(以下一行分空白)

花ちる里

卷の名哥ニよて号せり 此卷は源氏廿四歳夏五

月の事也さか木ノすゑもおなし夏の事也

(一行分空白)

わつらはしくなと—— 白虹日をつらぬけりといひし支なと

なるへし

麗景殿 二ツあり是はきり壺のみ門の御思人也紛るゝ也

中河 東河西河トいふか有ニ對して中河と云也

よくなる琴をあつまにしらへて 此事聞えぬ書やう也と昔

よりの評也 早竟よく鳴琴ヲ引と心えへし

もよほし。かほなれば 聞え 杜鵑の一名を催婦といへは也

ことさらにたるとみればよし／＼うゑしかきねもとて——

久しく御音つれもなきによりてと也 花ちりし庭の

梢もしけり合て植しかきねも見こそわかれね此哥にて

能々聞えたり

┌ (12オ)

┌ (11ウ)

本文料紙ヲ用イテ付箋ヲ貼付。
本行ト同筆。

つくしの五節からうたげなりしはやと—— 此をとつれの

なき間にはや主か出きたり

軒のつまとなりけれ ぬしとなると也

かりにもみ給ふかきりは—— 妾メイの事各を草子ニ云

たつる也

(以下二行分空白)

追

すこしさし出てみ入給へれば 車よりさし出て也

(以下九行分空白)

(白紙)

須磨

源氏此浦ニ謫居なり故ニ名トせり又ハ歌并ニ詞を以て号トスレ之ヲ

此卷には源廿五三月より次年までの事あり

源氏流罪なと有てはいかゝと思召て吾を須廣へ御隠居也

(一行分空白)

ひたゝけたらん住るは 物さはかしきを云也 叩ヒタゲ

入道の宮 藤壺の御事也男ニあらね共入道と云也

その折の心まきれに—— 式部もえ書ぬほとの色くくの

哀共イニ多かり

二三日かねて かねてとは以前ニと云心也

物ふかゝらぬわかき人くさへ 心浅き人くなり

まいりきて 只まいりて也きに心なし

こしのへて 塾居せる人の外へ出ありく事をは腰ヲのすと云ゝ

┌ (12ウ)

┌ (13オ)
┌ (13ウ)

┌ (14オ)

「共」のノ上ニ重ネ重キ。

猶花鳥ニ委し

とある事もかゝる事も—— 是より聞え給といふまで源しの

御詞なり

みつからのおこたりになん—— 吾からのわざと也

過侍にし人—— 葵上の事也

なつさひ

いにしへの人もまことに—— 左大臣ノ詞なり犯しても罪ニあはぬ

事もあり

されといひ出るふし有てこそ—— 此源氏は何のふしも

聞えぬにと也

中納言の君 源氏の何ある人なり

をしはからせ給へ 心えて仰られよと也

いはけなくおはせしほとより—— 大宮の人ノ也

殿におはしたれば 二条院なり

さふらひには 殿上の事也 源氏の御所をも殿上と云へしと

也足被仰けり

所せくつとひし馬車のかたもなく—— 前ニ段をして書り

おもしろし

大はんなとも—— 女房侍ある所也又は男もある也大裏ニあら

され共臺盤所あるもの也 大はんは殿上にあり

とのゐすかた 夜の姿の躰也

ひたやくこもり 無意趣ト云心也 帚木ニもあり

又たのもしき人もなく—— 継母ノ音つれなければ也

「(14ウ)

「(15オ)

下ニ擦消シノ痕有。

おもふ人ぐするは—— 具する也

立まさる事も—— まさる罪なり

はしらかくれにゐかくれて

かずまへ 数ニする事也

岩ほの中おほしやらる 須まの事也前ニもあり

ことなしにて—— 無事にて過たる義也 無為ゴトナシヒ

古むら鳥の立にしわか名今更にことなしふともしるしあらめや

此引哥不叶 河海ニ猶あり

れいの月の入はつるほど 入かたの事欵はつるは如何 是は三条ノ

宮にての事也 例は毎夜の事也

月影のやとれる袖はせはくとも 此哥にて能しれたり入かた一

定也

行めくりつるに——

さめて読給へり 罪なき身なればつるには帰らんとなく

しらぬなみたのみこそ 行末しらぬ泪也

世になひかぬ—— 弘徽殿かたになひかぬ人ノ也

ことそぎて 事除て也 文集 をし出して文集ト云へ白氏文集ヲ云也余ノ詩文より此

書日本へ早ク渡欵其ゆへに如此欵如何 むかしノ集共多ク有へ

けれと是ヲ 文集と云也

所ノの券など 御領の支證也

けいし—— 家のまかなひ人なり是らを少納言ニ付給ふ也

若君の御めのとたち花ちるさと これ皆源氏の御はくよみ也

┌ (15ウ)

└ (16オ)

とはせ給ぬもことはりに—— 文言也

あふ瀬なき涙の—— 逢ぬやうニわさとよみ給り

なかるゝみを 身をかくし題ニよめり

うかふみなは 同前

暁かけて月出る比なれば 定家の哥ニかけはたゝ霞むはかりの

山の端にあかつきかけて月いつるころ 源しは哥より

草子の詞を取てよむ事おもしろきと云ならはせり

なつかしうめてたき—— 藤壺也

ことはりなるや 草子の地なり

御山マツにまいり侍を 弄花には御山とあり

えそつゝけさせ給ぬ 是も草子ノ地也

さらなる事なれと 事新らしき申事なれと也

右近のぞう 中河ノ紀守か弟也

うへぎ冠も 可レ得也

まかり申シ給ふ 御いとまこひ也

名をはたゝすの神にまかせて 犯なき罪ノ名を糺の神ニま

かせてと読給り

有し御おも影さやかにみえ給へる—— 見え給ふやう也

真実みえ給ふにてはなし

なき影やいかゝみるらん—— いかゝ見るらんとは彼密通を思

恐るゝ事也

今日なん都はなれ侍る—— 文の言葉也

けいし給へ 啓

「(16ウ)

「(17オ)

わか心ひとつに—— 命婦我志出した様ニ歎ク也

をさめみかはやうど 掃¹地人也只下女の事也

かりの御ぞ かりぎぬ也

つもりにけりとおほえんとすらん すらんは行末をおもひて也

いける世のかきりをしらて 生別をしらて也

はかな²とあさはかに聞え給へは かなしな爰にて句を切てと浅はかに

と読へし

おしからぬ命にかへて—— 我死別ニかへ度と姫君のよみ給り誠々

あはれなる哥也

御舟のり給ぬ 鳥羽より歎

またさるの時ばかりに—— 思外はやき事也とて素然御一笑

サシセンリ
三千里の外—— 此かひにて三千里はたへかたきと也

おなし雲井か 是は哉なり

ちかき所³のみさう 御知行所也

水ふかうやりなしうへ木ともなとして 主人心安葉花竹

有和氣 是ヲ曳給ヘリ

むもれいたく むもれ句を切ていたくと読へし 埋レ苦ク

みぎはまさりてなん 涙の心也 紹巴發句ニなかれよりて

汀まされる水かな 三光院殿難し給るとそ

れいの中納言の君の—— 中納言ノ方へのやうニして朧月夜

の君にやり給ふ也 内侍のかみ也

こりすまの浦の—— 内侍のかみへの哥也

おきもあがり給す 源しの京を出給し時よりの事也

┌ (18ウ)

┌ (17ウ)

下ニ擦リ消シノ痕アリ。

かどりの御なをし ねりきぬてはなし只平絹也今も世間

あるきぬ也

すくくしう 疎略の心也

人ごとなれと 人言

心の曳かたにまかせず すもし濁へし

しほたるゝことを 此ころはいとゝあるに其まゝ付てしほ

たるゝと見るへし

中納言の君の中にある 中納言への文のなかにあると也

御さうじんにて 精進也 天神ノ御事を引給り河海ニ委

大殿のわか君の御事 めのとへの文の事也それとは

いはす

伊勢おの海士 いせへ男があまをする也

おほかり 多 文章の事なり文言多也

いふかひなきは 貝を兼てよめり

いせ人の波の上こく うきめはからてとはそなたの舟ニ乗

らほうきめは見すして有へき物をそなたと同心して伊せへ下らん

物をと也

あれまさる軒の 源氏故の心也

葎より外のうしろみもなき 垣ニ葎かなれは却てむくらか

後見ニなるとの心なり

かなしうし給フ君にて 寵愛ノ君也

おもひ出る事のみ 内侍の源しを思ひ出る也

えねんし給す 内侍のかみの心中也

┌ (19オ)

┌ (18ウ)

こほれいつれは 内侍の涙也
さりや さうあるやなり

いつれにおつるかと—— 御門ノ御詞の我欵源氏欵ト被仰也
うたひ給るに 聲に出して哥を吟し給事也

しのはれてあいなう—— て文字濁ル

けにいかにおもふらん—— 御前の人くも也

程につけつゝ—— 御供して来たる御前ノ人々也同事也

ちえだつねのり 千枝常則兩人也

白きあやのなよゝかななる御そしをん色など しをん色ノ

衣也 白きあやは一也 抄共ニくはし

哥 づらなれや たくひなり

かきつらね—— かきあつめてと云心也 つらねは鴈に

縁語也

哥 民部大輔—— 惟光也

心からとこよを—— 鴈にも故ありてこそ鳴らめ只むさと

鳴かとおもひたれはとなり

さそはれで てもし濁ル

おもひくたく 迷惑なり

こよひは十五夜なりけり 八月也 異説もありそれも又

面白しと被仰

哥 みるほとそ—— 見るはかりそ也

おんしの御衣は—— 菅丞相ニ御衣賜事もあり是ヲ曳給り

河海ニ有之

┌ (19ウ)

┌ (20オ)

左り右にも——王と大臣と也

大貳 筑紫ノ司なり此司は大貳も帥も同事也

帥 そちと誂へし

まがくしく 悲しき心也

打過ましや——三光殿はし文字を清給へり紹巴は濁

れり如何ム

くしとらする人もあり 口詩也 くちつからの詩の事也

河海花鳥に詳也

あひしりて侍る人々 都より下ル大貳の迎衆也

きさいの宮 大后也

ついせうするなと——源氏へついせう也

東のたい 源し常ニ御座ありし所なり

えねんし過すましう——紫上を須磨へよひまいらせ

度おほしける也

胡の國につかはしけむ女を——王昭君か事也

家にあからさまにも出さりけり すまにて面々の家ニ帰ら

ぬと也

心たからおもへるに

おほやけの御かしこまり 恐懼也勅勘の義

御めをさへ 妃

きやうさく すくれたる事也

みるにえまれて 頭の君の心也源氏をみるに也

たきのく あそひの道くなり 彈碁ノ具

ㄥ (20ウ)

ㄥ (21オ)

そこはかとなくさへつるも 海士ノさへつり也あまニ限て云り別の人の

上には云まし海士は人間にてもなきやうなるニよりてさへつると云也

見やりなる ま近き也

くらかかにそなる 馬の鞍か也

をのかしし 下人ともゞ吾とし別をしむ也

あかなくにかりのときよを 須まもかり初のとこよと

なり左様ニなけれ秋ノ様ニ成也是は春ノ事也心不叶底こゝろは

鴈也頭の君の御哥

ゆゝしう—— いま／＼しう也

むかしのかしこき人たに—— 聖廟の御事を引クそれさへ

なかりしと也

せんしやう 幕のやうなるもの也衣キヌなどにてしたる和ヤらか

なる物也 河海ニ委

はれに出ていふよしなくみえ給 はれかましき所へいてゝ見え

やうニ見事にみえ給ふ也 給ふ

ひちかさ雨 急にふる雨なり

さる心もなきに—— かやうの風ともおもはさりし也

不慮のかせ也

さは海の中の竜王の—— はもし濁給り

(一行分空白)

こゝの心を以て宗牧付句 おもふもかなしすまのいにしへ

なるかみはたゞおちかゝる心地して

(以下二行分余白)

┌ (21ウ)

┌ (22オ)

┌ (22ウ)

「哥」ニ「様」ト重ネ書キ。

追

かずまへ給て 数ニし給て也

二条院へ奉り給ふと入道の宮のとは書もやり給すくらされ給り

悲しみてあそはしかねたる也

からのかみ 唐昏也

つくり絵つかふまつらせはやと心もとなかりあへり 善からんか

悪からんかと心もとなくおもひあへり

ほこりにしなしてつれなきさまにしありく 下ニは思ひ

くだくべけれど上ニさもなきかほをする也それをつれな

きさまと云也

めざましうかたしけなく—— 忝とは有ましき事トいふ

心なり此ことは所により心かはるへし

御前にはけいし侍ぬ——なん 是は命婦か御返事の文言

つみうらん 罪得らん

父みこはいとをろかに—— 父みこは紫上の父也をろかには

をろそかに也 をろそかにおほしけると云心なり

(以下七行分空白)

明石

卷名以哥井詞号ス 源氏廿六三月より廿七の秋婦

京までの事あり

猶雨かせやます——

周公丹左遷の事を引金^{引金}藤^藤の書ノ
事花鳥ニあり素然被仰是は金ノ箱ニ籠^籠入たる書也

はふらかしつるにやと—— いたつらになすにや也

┌ (23オ)

┌ (23ウ)

「へり」ニ「悲し」ト重ネ書キ。

下ニ擦り消シノ痕有り。

道かひにてたに 常ニ人の世話ニ道かひもと云は。垣本也道これも

垣の心欵不知と也足被仰候 河海には道の引かひ也注す

袖打ぬらし—— 袖にもなみの立やうなと云々
ひふり 氷ふり也
かほのいとからきにも—— 迷惑したる顔なり

みてぐら 幣なり

どよみて

深き御うつくしみ—— 古今ノ序ニあり延喜ノ御事ニよく叶

御やしるの方ニむきて 住よしを指て也

大炊殿 臺所ダイカなり

ふみとゝろかし 非雷しかれ共縁語おもしろし

とやかくやとはかくしう—— 物を仰られうする人もなし

いたうごうし—— くだひれたる心也 却此字也

是はたゝいさゝかなる物のむくひなり 何事にてもあれ

少しの物の報なるへし 延喜に比する事なれへ聖廟の御事にても

有んか 是は下心也

うつゝの—— 現マ

とくひ 知音の事也 得意

うつゝの人の心たに—— 人間さへ上なる人のいふに付ば吉し

まして神の告なれはと也
しりそきてとがなしと—— わか支を退て人の事に

随ふ事也

はぶくとても 鳥の羽を広げてかくす心也

「(24オ)

「(24ウ)

下ニ擦り消シノ痕有り。

かきりなく悦ひ—— 入道自身御迎ニまいる

たてまつりぬ 御舟にのせ申事也

らうじしめたる—— 領したる也

三昧 不断ニおこなふを三昧と云々

ほのかに見たてまつるより—— 入道はしめて見奉る歎

都の人もたゞなるよりは—— 紫上の事也

こゝにはかしこまりてみつからもをさくまいらす 怖て入

道ちかくは参す

さらほひて 瘦やつれたる事也 饒サラボウ

くつし出て聞ゆ かたはしよりことくく語ル事也

かゝる所をも—— 是よりは女の事ムスメ

さこそいひしか かもし清給り

四月に成ぬ うつきと読給り

御丁の帷—— 衣かへニ御簾などもみなかゆるもの也

かうれうと—— 替康か引し手也此人は七賢ノ中ノ一人也

一段の上手也 花鳥ニ委

はまかせを曳ありく 諸人琴ノさたをのみ云也

大かたにの給ふを—— 世上の事ニの給へり

あそはすよりは—— 入道わかむすめの事を云

三代になん 延喜の御弟子の又弟子也

前大王 前の字清給也 延喜也 異説何れぞの親王欵

入道の詞也 吾女の琴の音これニ似たと云り

山ふし 入道わか事ヲ云り

┌ (25才)

┌ (25ウ)

あやしうむかしより—— 是より源氏の御詞

女五の宮 あふひの上の母みやの妹なり

かきなでイの—— かいなでと読給り 上ばかりにてよく

くじらへ手のゆきとゝかぬ支也

角

商人の——侍り 是迄入道のことばなり琵琶行ヲ引キ事ニして

吾女の事を云る也

たどる よく尋る也

すぎぬたれば 御前ニとをくゐる

すくしてかい引たり すゝみて也

ゆの音—— 左の手にてあひしらふ事なり

かきくつしきこえて—— かたはしより迷悉テ語ル

六時のつとめ 六時ムトキ むときとはよます

さるものにて さし置てと云心なり

をきて侍る 掟なり

兄 ひとりねは—— 入道の歌也我女を御憐愍あれと也

兄 旅ころも—— 源氏の哥也旅なれば吾はねられぬと也旅の

字よく用ニ立たる哥也 浦なれ給つらん人はとてとあるに

よくこたへたり 定家卿の哥ニ草枕たひねもよほす松

風に此里人や夢結らん

子サメ歌

おもふにはとはかりやありけん 思ふには爰にて句を切て下を

読へし

たもとにつゝみあまりぬる—— 早竟かたしけないとの心也

なかもらん らんは入道の歌なれば也

┌ (26オ)

┌ (26ウ)

押紙。

せんじかき 仰書ノ事也 又せんじかきの局と云事

ありそれは官の様なる事也女房かたにある支也

しめたる紫の昏に 匂ひをしめたる也

見ではやまじと

かるくしきやうにおほし—— 聊余ニな恐怖ありそと也

うちにも宮にも 宮とは弘徽殿なり 弄花は東宮と

あれ共それはわろし

大宮 弘徽殿也

給てん たひてんとよみ給り

こちまいらせよ 源の御所へ也

よこもりてすくす年月こそあいなたのみに—— 末ニ物ノ残る

なりはかなき事をすゑに頼ム心也

ゆくりかに 不慮ニなり

ほとけ神をたのみたてまつりて 六時の行又は住よしの

御社の事等也

まつ恋しき人—— 紫上也

哥 月毛の駒—— 雲ゐにかけれ面白し

いたき所まさりて—— 念を入れて作たるさまなりほめたる詞也

こよなうも人めきたるかな—— 源の御ことは

哥 むつことを—— 源の御うた也

あてにそひえて—— 少しすみたる体也やはらかに斗はなし

こゝにもかゝる事—— 入道の心中也忍ふ故ニかくおもへる也

まつことにはす 待事ニする也

┌ (27オ)

┌ (27ウ)

まことや我なから—— 紫上への文言なり

ものはかなき夢を—— 明上の事也

兼てをしはかりおもひし—— 思よりかなしきと也

年月を過し給ふか—— 紫上のはざなり

絵をさま／＼かきて—— 紫上へやり給へり

いかて空にかよふ御心ならん 草子の地也

承香殿—— そきやう殿デと読へし 今上と申は

是也王代記にては冷泉院と見ゆ 入道さるへき事とおもひなから さうあらう事とおもひなから

こゝろしれる人／＼—— 良清惟光なとなるへし 也

むつかる 暗事にてはなし

たゝならずおもへり 良清も心懸たればよし清か心中也

ねたき音そ—— しゆんなる音也

なをさりに—— あかしの上の哥也

ことにかはらさらなん 別ホニかはるましいとなり

口／＼しほたれ——なん 皆ハ人／＼哥なと読メれ共それは 畧して

書ぬと也 是又草子の地 御よそひはいふべくもあらずみそびつあまたかけさふらはす

源氏のは云ニ及ツ其外ニ多ク奉ると也さふらはすノすもし清へし

みそびつとは御シぞ箱也 御衣櫃アマタ荷

しほどけ

かたみには—— あかしのうへの方へかと思えたり入道のかたへとは

みえず

┌ (28オ)

┌ (28ウ)

┌ (29オ)

下ニ擦リ消シノ痕有リ。

さかひまで　しかと所はしれずどこぞの堺なるへし

御けしき給る　御氣色キシホロを伺也　御きげんを也

おもひ捨かたきすぢ——　懐妊の事なり

みなをし給てん——　向へ申さむとの義也

いと物おほえず——　入道の心中

たけきこと、　せうやうもないと云事也

心のおこたり——　心のとがと後悔也

めのとほゝ君なと——　御帰京のあとにての事也

ほけられて　入道の事　ほれたる也

手をすりてあぶきあたり　茫然として居たる躰なり

あはめられて　わるくいはれて也

俄にところせうて　さはかしうて也

へがれたりし　へりたる也

哥　世中もいと恨めしうなん　天下の政ノ悪キを恨み給り

欺つゝあかしの——　あかすとよせてよめり　古抄共委

まくなき——　目くはせの事也色々ニいへとも別なる事

哥　なし伊物ニめくはせよもたのまるゝかなとあり

須まのうらに——　五節の君のうた

かへりては——　却而也結句なとゝ心也

御せうそこなとはかり——　御つゝしみあるニ依てなり

(以下二行空白)

引哥君か行海辺の宿に霧たゝは我いき——　下を忘却也足御物語

追

「(29ウ)

「(30オ)

紙片挟ミ込ミ。4行目「嘆つゝあかしの」ノ引歌。

今日かく命をきはめ—— 今日を今かくと心をやりて見るへし
あとのなをはぶく 名を也 猶にてはなし

あばめられて ちとわるくいはるゝ様なる心也天子の御句に

わきて吾あばめらるゝもにくからて 水中御物かたり

よとゝもに 一生涯ノ事也

須まはいと心ほそくて—— 明石にての詞也

すまゐたれば すかし居也あらけるたる様躰也

人すゝみまいらはさるかたにてもまきはしてんと—— 源の御心也

あかしより人來らは良清か心をもなくさめられよかしなと思し

めせ共あかしの上心高てそれにはつれなき氣色と也 さるかた思し

とは使の人にてなりともといふ心也

ねたけにもてなし—— つれなくいやがる様なり

おもふらん心の程や—— あかしの上の返哥也源氏の

歌も共に一条院の御製を取れりまた見ぬ人とは

明石上のわか身ノ事をよめる也源氏のいまた見も。給はでし

聞なやみやし給らんさやうならぬ身也と卑下たる

心也 又一説は上ノ二句はかく数ならぬ身ニかゝる御消息

のあるを疑て思らんこゝろのほとどのやよいかにと云りまた

みぬ人とは侍人もかゝることをや聞らんと憚たる由也

なやむとはもてあつかふをいへり 一条院恋しとも

またみぬ人をいひかたみこゝろに物のなげかしきかな

(白紙)

落標謹イ

┌ (31オ)

└ (31ウ)

┌ (30ウ)

哥を以卷の名とせり 源廿七也次年廿八十一月迄の事あり
廿七はあかしの卷ノ末ト同年也

院のみかとの—— 院とは即位なきをも申ス但即位ありし

をはみかとの字を添てゐんの帝と申也

かく帰り給て—— 帰京ありて父みかとの御吊あり

おはします中にも 大裏にてはなし

此人をえけたず 源を也

みかとは—— 朱雀院の御事也 仁弱ニおはせり恵帝ニ

似たり此古事ヲ引給り

世中のこと—— 政その外諸事こもる

大かた世の人もあいなくうれしき—— 一かたニおもふを
あいなくと云り花鳥の儀はわるし 又河海ニは

無愛嬉しきとは真実ニかさらす悦ふ心と云り

おりゐなんの御心つかひ—— 御位をゆつり給んの御心中也

内侍のかみの—— 朧月夜の内侍也

おとゝうせ給ふ 二条のおとゝ内侍のかみの父

大宮もたのもしけなく—— 悪后也

わか世のこりすくなき—— 朱雀の御心中也やかておりゐ
給んニと也御位のこりすくなき也

とまり給ん—— おりゐ給て跡の事也

むかしより人には—— 朱雀の御詞也人にはとは源氏よりは思ひ

おとし給へれと我は心さし深クおほすと也

たちまさる人—— 朱ノ御詞なり 源の事を仰らる源の

┌ (32オ)

┌ (32ウ)

心さしは吾ニはなすらふましと也

うちなき給ぬ 朱雀の也

女ぎみ 隴の内侍也

つみわすれて 隴、うつくしきに依て何事もあしき事なと有

とも皆忘るゝと也

なとか御子をたに—— 朱雀の御こと葉也みこたにおはせ

ぬと也

ちきりふかき人—— 源の御事也

み出給てんと—— 源氏の子出きたりともたゝう人なれは

くちをしからんと也

御かたちとなまめしう—— 内侍のかみの言葉 めてたき

人—— 源氏の事也

めてたき人なれとさしもおもへらさりし—— 前大臣（后）の源し

を聲にと有しかと源御同心なかりけり おもへらさりしとは

此事也 物おもひしられ—— 今おもひしるなり

吾名をは—— いたうき御身なり とは内侍の御身也筆者

の語也 此もと花鳥のにはちと替れり 比あたりは伊物ニ

二条后清和の御事を御聲はいとたうとくて—— なんとゝ書るニ

似たり

大納言（シヤアナゴシ） しやあなこんと讀給へり

はゝ君は うす雲の女院也

うちにもめてたしと—— 大裏（シヤ）も也朱雀なり

「 (33オ)

「 (33ウ)

下ノ文字ヲ擦リ消シ。

虫損。

御国ゆつり 御讓位の事也

太后—— 大きききには御隠密欵

かひなきさま—— 朱雀の御詞也御位をゆつり御
隠居ありて長閑なるやうを御覽せらるへき事をお

ほすと太后へ申給也

承香殿 此親王は今上也鬚黒の御いもうと腹也

シヨウキヤウ シヨキヤウ ソキヤウ 何れもくるしからず

内大臣—— うちのおととよめり 内大臣は左右の大臣の外也

令外ノ官と云々 かす定とは左右ノ大臣なり故ニ加ハルト云り

さやうの事しけきそくには—— 源しの御詞也事六かしき

職には御堪忍成かたきとて致仕の大臣にゆつり給也

職ソトよめり

ちじのおとと—— 葵上ノ御父再ヒ撰政あれと源氏の仰らる也

例共古抄ニ委し

ひじり 聖人の支也

世中すさまじきにより—— 二条ノ相國むつかしきに

よりて前に位を返し給也

四の君の御はらの—— 後ニ弘徽殿の女御欵 四君ト云は二条ノ

大臣の四君也権中納言頭の君の御上也

内春宮の殿上し給ふ 是は童殿上と云もの也 元服には

あらずおさなくして殿上し給也

こひめきみ 葵上なり

みやおとと 葵の御父母

ㄥ (34ウ)

ㄥ (34オ)

下ノ文字ヲ擦リ消シ。

たゝ此おとゝの—— 源なり

御心ばへ

さいはい人—— 縁づきの事也 源氏先恕をおほし召

てかやうニ成るゝなり

中将中務やうの人く—— もと源の御心かゝりし人く

二条の院の東なる宮—— 松風卷ノ初ニあるは是也

めつらしきさまに—— 男子には夕霧のおはせり女 子は

めつらしきとなり御祝着也

すくようきやう—— 大唐より弘法大師ノ持来也むかし

一段用たる物也 宿禰經

あまたのみこたちの中に—— 源氏を桐壺の帝ノ別而

御寵愛ありし事也御門の位には宿世とをしと源の思召也

太政大臣にて—— 夕ぎりいまた太政大臣ニあらす然は

すゑを残して書たる心面白しとそ

うちのかくて—— 冷泉院の御支なるへし

かの人—— あかしノ上なり 明石ノ中宮也

さる所にしも—— あかしの浦の事也

ふかくもおもひたとらす 遠慮ニ及す

さは聞えなから—— 領掌は申たれと何とかあらんと

又ちと思案出きたりさりなから慙に仰らるゝにより

御意に任んと也

あやしうおもひやりなきやうなれと思ふさきことなる事

（35オ）

（35ウ）

下ノ文字ヲ擦リ消シタ跡有リ。

虫損。

事にて—— おもひの外なる事にて我もかのあかしに

住し也きやうの支思よそへてねんし給へと仰らるゝ也念し

給へとは堪忍し給へとの心也かく仰らるゝはおもひやりなき

やうなれとゝなり

うへの宮つかへ時ゝ—— 宣旨のむすめの事

とりかへしつへぎ—— 明石へはやりをしく思ひ給也

けにおなしくは御身ちかくも—— 宣旨の女の心中也

源しの御そばに有度と也

かねてより—— 源氏の御哥

いたしとおほす よくよめるとおほす也ほめ給也

口かため たもし清り

おろかにもてなし給ふまじと—— 姫君をなり

返まいましめ—— 仰やらるゝなり

いつしかも—— 乙女子は姫君をさして

いたはしうをそろしきまで 冥加ないなとゝいふ心なり

かしこき御心—— 少将の君の心中也御こゝろとは源氏をさして

云り

かしつきゝこえんと—— かしつかむと仰らるゝ也

あやしき道に—— めのとの心こと葉

子もちの君 明石のうへ也

とくまいりなんといそきくるしがれは 京へとくまかり上んと

使の急なり

ひとりして—— 何の手もなき歌也よく聞えたり人の母

〔(36オ)〕

〔(36ウ)〕

虫損。

親の子をおもふ心かくのことし〜

女君にはことにあらはして—— 紫上也

きゝあはせ給こともこそと—— 紫上の御聞ある事も有んと

おほして仰出らるゝ

おもふあたりには心もとなくて—— 紫には御子なくてと也

女にてあなれは—— 女子なれば詮なき事そと云くたし

給りむらさきの上への御ついせうなるへし

尋しらでも—— あかしを也

そよ誰ならはしにか—— 吾こそをしへたてたる紫上

なれ誰ならふ物えんしそと仰らる

この人をかう—— 明石上の事也さう人の云し中ノをとりの

腹に女は出キ給へしなと云し事也

人からの—— 所からのおもしろきにより其人も面白ク覚えしと也

哥
思ふとち—— 明石上と源氏と也 それに先立んと恨て紫

上のよみ給たる哥也

叶かたかへきものなめれ

彼すくれたりけん—— 明石上の上手にておはしませは也

みところありとおほす 余り物えんのなきもいかゝよき

比なる物えんし也少しの力ありてよき程らひと思す

女君のあはれに—— 懇にし給也

をさ〜をとらぬ人—— 入道の求たる人〜也

類にふれて その縁〜ふれて也

「(37才)

下ノ字ヲ擦リ消シ重テ書キ。
虫損。

岩ほの中—— 世を捨る人なり

是はこよなう—— 少将の君の事なり

いとたげく—— 随分の事也 あかしの上自慢ノ心也

あはれ人は—— あはれ めのとの心中なり

かすならぬ—— かす みしまかくれば身とかねて讀り明石上ノ哥也

かゝれはなめりと—— かゝ 紫上ノ心中也源の思ひ付給も道り

なりと也

かく此御心をとり給ほとに 紫上の機嫌を取給り

おほしおこして 興也

そばみ—— 風流めかす隔心なきやうだい也

女御の君に——

とりくくに—— 源の御心中

をしなへてたく—— を をしなへてとは世上源水鶏ニと也うはの空

なる月とは我には非ず別人ノ事也女を疑たる作意也 月も

こそ入レと落付てはあれ共入うすると云心也

空なゝかめそと—— 須まへの時花ちるへの哥ニ行めぐりつゐに

すむへき月影のと有し此哥の事なり

おいらかにらうたげ也 大様也 さして恨は給す花ちるの

本性此分也 啾ニ猶くはし

五節—— かのつくしノ五節也 源しを思ひ忘ぬ也親は縁ニ

女ものおもひたえぬを——

付んといへと同心せず 花ちるを思ひ人各ノ後見ニと

「(38オ)

「(38ウ)

虫損。

虫損。

源のおほしめしける也

作りさま——今めきたり 是は本々の作やうにてはなし五節

なんとやうの人あまた置給ん用ニ少し私のつくりさま也

故に今めきたり

はなれいて—— 内を出て春宮の御そばに御座ある也

入たう後の宮—— きさいのみやとよめり

院司^{イシヤ} し文字清

としころ——おほすさま——ければ—— 薄雲へ自由ニ参り

給ふ也

なへての世には—— 誰もさはなけれ共兵部卿へはあたりかまへ

なりそれを入道の宮笑止に思召す也

権中納言の御むすめ 葵ノめい 頭の君の御女なり

兵部卿宮の中の君 紫上ノいもとすゑの末也然れ共中ノ君と書り

すみ吉に—— 御堂殿のを其まゝ似せて書たり

かんだから 神宝也

十づく つもし濁れり

内大臣殿御願^{ウチノ大臣ノイハヒ} うちのおゝいとのと讀へし

いろふし 色や節ニおもふなり 色節一ツニ非す二ツ物也

田舎人—— あかしの人くく

馬そひ

わかきみの—— 明石の姫君也

國の守—— 撰津の守也

例の大臣などの—— 尋常の大臣の御参詣よりも

「 (39オ) 」

「 (39ウ) 」

虫損。

重不書。
虫損。

別て馳走申なり

いとほした——あかしのうへの心中なり

神の悦ひ——東遊求子己下種々の事なるへし

惟光やうの人——須まへ御供せし人くゝなり

あからさま——暫此字也又は白地トモ書——暫時ノ事をあからさまと

云也——哥暫ノ字心よく合へり

あらかりし波の——須まにて風波のあらかりし事也

み社たち給て——神前を去給ふ也

御車のもと近——先は先後は後ほと次第くゝニ下麿也車ニ

近き程があかる也

心のみうこく——明石上の心也

いらへの物に——ぬさの道具に付たり幣などにて有へし

日くれかたに——一段おもしろき景気なり

なにはかくれず——難波を含めり

をのかこゝろを——あそび共か心なり

かの人は過し聞えて——かの人は明石上也過してとは源の

御参詣を過して也

みてぐら——奉幣なり

嶋こきはなれ——余の引哥もあれとあかしにての事

なれはほのくゝとのうた然へきかと仰らるゝ

中空に心ほそき事やあらんと——京にても何とか

あらんとおもひわつらふ也京を耻る心也

つれなかりし御心ばへの——御息所の亥也

┌ (40才)

┌ (40ウ)

下ニ擦リ消シノ跡有リ。
虫損。

よしづき給へる—— 御息は元より一段ト風流人也

尼になり給ぬ 事文類聚ニ尼の字訓阿幡トアリ阿幡ト

云女アリ此女尼の初メ也 也足軒此事ヲ始テ見出たると仰らる

さるかたのものをもきこえあはせ人に—— 此御息所は一

段風流人なるによりて何しき事をも御談合ありしニ也

心ほそくて—— 御息の詞なり

うたてある—— 親の身にては申にくき事なれとム也

よついたる—— 好色かましき事ニおほしよるなど也

うき身をつみて—— 御息のわか身にて思しれりそなた

ゆへにさま／＼おもひを添る也 身を／＼つみて人のいたさを

しるといふ心也
いかてさるかたを—— 源氏の御ことは

とはくらふなり 外也

木丁—— みすニ必そふ物也ほころひよりとあれは直ニ御

対面とは聞す
ひそびかに 潜也 イ本ひぢぢかに 是は人近と云事也

啣ニ委

さばかりの給ふ物を—— 好色の事仰らるム物をとおほし返す也

いとおそろしげに—— 恐かましい也御息の詞

ちかくまいりたるしるしに—— 源のことは也

むつびおぼすもおさ／＼なきを—— 源氏の御兄弟たち

齋宮へむつひたまふはなきを也齋宮は院の御子分ニ有し

すこしおとなしき齡ながら—— 源ノ詞也あつかふ人

「(41才)

「(41ウ)

「(42才)

虫損。

なきとは御子達多くもなきと也

とかくの御事などをきてさせ給ふ 源氏御息の趾の

掬なと仰付らるゝ也

たのもしき人も—— 御息の御あとにしかとしたる人をは

事ともさためける 何事も此人く共申さばくなり せぬ也

御身つから—— 源也

女別当^{ニメグスガ} 齋宮の御内^ニある人也

きこえさせの給ひをきし事—— 源の御言葉也御息

御遺言ノ事なり

としごろの御心とり返し—— 吾ゆへニ御息さまくの

御もの思ひありし也曳そこなひつるよとおほして御後ノ悔ノ御心也

数もなく—— 大勢の事なり

ふりみたれひまな—— 雨をたち入てよめり心は明白也

人つてには—— 御自筆ニあらては勿^{ナキ}蘇^{ナキ}。なと云て女別當等

御異見なるへし 御異見なるへし けたかき様也

あてはかなるすち—— 奥ふかき躰也

おくまりたる—— 給^{おと}ふまし^{かめり}かめり

いかてさやかに御かたちを—— 有けん 草子の地也

我御心も定かたければ—— 好色の心はもつましきとおほせと

それもさためかたしと也

下つかたの京極なれば—— 面白き躰そと也足御感あり

ねなきかち—— 齋宮 けり

┌ (43オ)

┌ (42ウ)

虫損。

下ノ部分ヲ擦リ消シ裏カラ紙ヲ補フ。

おなしき御親—— 御息の事也

心にまかせたる事—— 人の御媒などすなと仰らる
いつかしかり いくくしかり也れきくくの

夏也院の御心ちとかゝれり

院より御けしき—— 院の御心ノかゝるニ入内させまいら

せんは如何々と思し召ニよりて薄雲へ御談合なり

入たうの宮にそ—— 爰にて源入道の宮へ仰出て御談合也

いとをしくおもひ給る—— 御息ヲ末もとをらぬに

わか曳そこなひけると源おほしける也

すこしものゝ心—— 齋宮の事

いとようおほしよりけるを—— 入道宮ノことは也

かこちて—— かこつけて也

しらすかほに—— 院の御前を知らかほにてと也

おほしとかめじ 院の御たゝりはあるまじいと成り

かずまへさせ給はゞ 入道の宮の詞也談合ノ人数ニなし給
はゞと也

とさまかうさまに—— 源ノ詞也

かくまでさはかりの—— 六条の宮なと作る事

世の人や—— 我好色の為かなとゝ人のおもはんと憚かる也

こゝにわたし—— 六条の宮へなり此心あてに作らるゝ

ひまある中にて—— 中のわるき事也 間ヒマ

宮の中のきみ—— 兵部卿ノ宮の御女なるへし紫上の

御いもと欵 爰は入道の宮の御心中欵

すこしおとなび—— 草子の地也

┌ (43ウ)

┌ (44オ)

下ノ文字ヲ擦リ消シタ跡有リ。

(以下九行分余白)

追

いてやいかて見え奉らん—— 源氏の御詞也心中をいかてかみえむと也

^哥 数ならぬみしまかくれ—— 撰^哥 笏ノにも豆笏ノにも非ず只嶋也

^哥 所からなればほのくとの歌の余情にてみ嶋かくれとよめり

^哥 住よしのまづこそ—— つもじ濁へし 松先かね

^哥 みをつくし恋ふる—— つもし清へし 是も兼たり

^哥 などみをつくし 同前

(以下三行分余白)

(白紙)

よもぎふ

卷名は詞并^ニ哥を以て号す 此卷はすゑつむの君の

列傳と見へし 并ト云は京の事を書クに又関東

の事をかき添たる様なる事也 列傳と云はその人の始末

を一分悉ク書事也史記の書やう如此と也

^{明云} 此卷横の并也源氏廿七才八講などの事より廿八歳みを

つくしの末の支ありすゑのこと葉にふた年はかりこの

古宮になかめ給てとあり末は豎ニ成ぬるニや

御たもと 御字愚本にはなし

大空のほしの—— 河海ニ委あり但それまでもなし大

なる御かけを少分の御身上に頼み給ふ心なり

神ほとけの—— 源の御事也

┌ (44ウ)

┌ (45オ)
└ (45ウ)

┌ (46オ)

46丁ノ折山部分、約1種ノ糊代
剝落。

さるかたにありつきたりしあなたの年比は—— 源氏ノ

御はぐくみなき前ノ比はさひしさに堪なれつるか中ノ

の御はくゝみにていま又絶ぬれはかへりて堪かたきと也

さやうにせさせ給て—— 此宮所をは御賣ありてをそろし

けなき所へ御移あれかしなと云也

あないみじや—— 末つむの詞なり

こだい 古代

なま物のゆへ—— 物数奇なる人の事也今時も茶湯の

数奇なとする人は如此也

見よと思ひ給てこそ—— すゑつむのことは也

おなしきほうしと—— 法師は惣なみ物ニかまはずつき

なきもの也其中にも取分てと云心なり

しもの屋とものはかなき イ本ニ下の屋もののはかなき

何もよし

はこやのとし しもし濁るへし

まさぐり物 くもし濁る

めのと子 こもし濁る めのとの子也

今の世の—— むかしは看経をする事はなかりし也

をのれをは—— 受領の妻とて末つむのおとしめ給ふと云也

侍従か詞也をは君の存分を女共ニかたる也

もとよりありつきたる—— 草子の地也花鳥ニ委ッなみの

人は思ひあかるものなるにさかるへき宿世にや卑れつたる

御をば也 直ノくしきとはいやしき心也

┌ (46ウ)

┌ (47オ)

我かく——をはの心

こちたき 事の外なり

大貳に成ぬ 大貳も帥も受領よりは上也

うけひ うけいと読へし 悪口する也わるく云支也 法花経ニ

如是人

かなしかりし折の—— 須麻への時の事也

たけく 心つよき事也

かけはなれて—— 源ノ御事也

ありへて 彘にてはなしへ也 経の字なり

くはしくはきこえし—— 筆者ノ詞也

御八講 みをつくしの是也

さえずぐれ さもし清ム

佛菩薩 ぶつぼざつと読つへき事也ト素然御不審也

しかれ共御抄ニほとけと付てあり

よき車にのり をば君ことの外ニくはをせられたり

ゆくりもなく—— 不意ニ也 案内なともなき様子也

みつのみちたどる 舍中竹下関三逢 蔣翹 字嫻 三徑就

荒松菊猶存 陶淵明 中文真寶 三逢は門ニ行みち井ニ

行みち厠ニ行みち 此三ツはいかなる家にもあるもの也

出たちなん事をおもひなから—— をばの詞もおもひ

なからとは忙しなからといふ心なり

ゆく道に心を—— 旅たつにいまはしくて機嫌を

なをしゝなり

「(47ウ)

「(48オ)

「関」ハ「開」カ。「蔣翹」「嫻」ニ朱引。「陶淵明」「古文真寶」ニ朱引。

心わけ給ふかたもなかななり

はなれにたんなり

なくく 侍従

送りはかり—— 時の詞ニすかして云り

たけきこと—— せうするやうもなきと云事也せめての

夏にて也 此已前にあるは心つよきと云心爰にては心少し

かはれり

わか御くしの—— 末つむは一段髪のうちくしかりし人也

くのかかう 此事説多しされ共まつ薫物の捻名と

心得へし一つほとあるとはたきものなる事疑なし

くらうなりぬと—— 人く急也

引いづれば 車ノ事也

世にもちゐらるましき老人さへ—— 侍従か事を女共か

云也

をのかみ々に 身くなり

はかなきことをきこえ—— 侍従か事也

めつらし人に—— 紫上也又めつらしきにとある本も有り

源の帰京めつらしきに依てもさはかしく障なきと也

此説もよしと也足は仰らる

その人はまた世にや—— すゑ摘の支

をしとゝめさせ—— 車

しか侍り 惟光か詞也

よく尋よりてを—— 久き事なれば余ノ人にかたらはるゝ

┌ (48ウ)

┌ (49オ)

夏も有へければさやうの事能く問下仰らるゝ也

哥
もりぬれたる 雨露なるへし

なき人を—— 末つむは一段下手なるか此歌はおもしろしされは

心内ニ動詞外ニ頭と云は是也古宮ノ夢より此哥出たり感

ふかしく

なごやか やはらかなる儀也

ちかうよりて 惟光

かはらぬ御ありさまならば—— す多つむの別人ニまた心

うつり給すはと也

むつかしければよしく—— 惟光か心詞也

しかく—— 惟光か詞也

いかゝすへき—— 源氏

ゆへある御そうそこ—— 歌をよみ懸たけれとなり

御使の立わつらはんも—— 御返哥をそかんと也

木のした露—— 宮城野々古哥の心也常陸宮といへは

宮と云字ニよせある也

むとく 無徳なり とり所なきと云事也

みる人なきそ—— 人めしけからぬかせめて心安きとなり

をところかい給ぬうらめしさに—— 驚かし給ぬ也源しの

詞也末摘の何共御尋なきを恨と也

杉ならぬ木たちの—— 姿也待ニとり成たり 是は素然の

御説也 花鳥には少ッ相違

まけきこえにける 心くらへにまくと也

┌ (49ウ)

┌ (50オ)

かたひらを—— 木帳の帷なり

かゝる草かくれに—— 源の御ことは也

花のたよりに 藤花也 すぐつむのうた也

人の上まで—— めしつかはるへき者ノ事まで御心ニかゝる

なげの御すさひにても—— かし 筆者ノことは

木草のはも—— 主人心安楽花弁有和氣 引寺 給り

御けしき給り 源氏へ御意を得たる也

今すこし——とそ 此書さま面白し常ノ物

かたりは遺恨ある人などには其あた恨ことのほかに當て

書を是は書残して置たり余の物語には替れり侍従や

をはの曲なかりし事此あた思ふまゝ有へき所を書

残したりおもしろし〜此草子ノ風は別也かき留

に聞ゆへきとぞと書て我書たるやうニ見せず面白く

「(51オ)」

追

塔こほちたる人も 河海ニ顔叔子か事ト云、貞心の事也

花鳥ニ顔叔子は男ト云、如何 かつらの中納言ノ物語ニ丁こほつ

とありまことしき女の支也 畢竟じつほうなる人の事

なるへし 河内本にも丁とあり

わざとこのましからねと—— よき事と好むにては

なけれと也

いそく事なきほとは—— さしきりたる用なき時は

同じ心なる文なとかよはしても慰むものなるニ此すゑ摘は

「(50ウ)」

「寺」ハ「詩」カ。

さやうの事もし給ぬ也

二とせはかり此ふる宮に――

これよりは筆者の詞と花鳥
載たり

(白紙)

(白紙)

関屋

以詞卷の名と号 此卷横の并也 みをつくしの末に

廿八歳十一月はかり迄ノ事あり蓬生は四月比までみゆ

仍此卷横欵

是も空蟬の列傳とみゆ

(一行分空白)

伊よのすけといひしは―― 故院かくれさせ給ひて

又の年源氏須厂へ趣たまひし前ノとし常陸ニ成て

くたりし也 一往はてゝ上れば五か年目ニ上京也一任は出

入四ヶ年也それを悉しまひて上れば五年めにのほる也

伊与ノ介常陸介上総介是ヲ三介と云也守とはいはす何も

介トいふ也介が守也守達も此國名をは付給りつねの

國名にはかはりて一段賞翫也すゑつむの父宮も常陸宮ト

申けり

ゆるぎくる おもしろく書たり

車ともかきをろし―― 牛をはづし轅うづをろす

是車の礼なり

くゝりぞめ ぼうしなときせたる染物也

御くるまは簾おろし―― 旅人を憚り給ふ也

おほぞうにてかひなし―― 大よそ也

┌ (51ウ)

┌ (52オ)

┌ (52ウ)

└ (53オ)

「――」(朱)

なしいて給て—— 家人ニなし給也

「^{キトイ}日はちきりしられしを—— 文の詞也

関やいかなる—— 屋にあらすやもし也出葉ニ見て可
然と也

たゝ此君の御こゝろに—— 空せみの君也

ありつる世に—— 常陸かある世ニ也

みるに命のかきりある—— 常陸か心詞

なきげつくれと 情作なり つもし濁てよし

めつらしき事を—— 河内守かすき心の事なるへし

(以下六行分余白)

追

とし比のとたえもうあゝしく—— 久ク絶て今又

始たるやうなと云心也

(以下八行分余白)

繪合

以詞卷の名とせり後拾遺集ノ詞に正子内親王繪合

の事見えたり扇合双番合根合等皆ノ歌ヲもて詮要

とす源氏卅歳の時の事也多合は三月の比也廿九歳の

事は物かたりニ所見なし みをつくしと此巻との

間一年ありその中なるへし

(一行分余白)

前。齋院宮御まいりの事 前。の字清へし 是は秋好ノ

君なり

院はいとくちをしう—— 朱雀院なり

「 (53ウ)

「 (54オ)

「 (54ウ)

「院」ノ字ノ中央ニミセケチノ
印アリ。

かうごの箱　こもし清濁何れもくるしからす

とのもわたり給へる—— 源氏なり

さしぐし　けつる櫛にはあらず只髪ニさして置也かざり也

とばかり　しばらく也

此御返は—— 女别当ニ源しの問給り

あるまじき御事なり—— 院に對して御返事なんと今は

有ましき支なれとゞ也源の御詞なり花鳥

^哥いとなまめき—— 朱雀の御事也廿五歳にておはす

かへりて物は今そかなしき　帰京也

あはれおはせましかは　御息所の事也

中宮もうちにそ—— うす雲も大裏ニ御座あり

めてたしと—— 齋宮下向の時朱雀はよく見給り源氏は未

しかと見給す

いとあらまほしとおもひきこえ給り　齋宮をほめて也

いましめて　念を入れて也

女君もろともに　むらさきの上也

ことのいみあるは—— 長恨哥也昭君ノ絵などは國の破なんとの

事なれはいみあるとは云也　河海にくわし

こたみは　此度なり

いうそく　有識　物しり也　出家の上ニ知識といふかことし

あはせてあらせふ　左より始めて右から難を云もの也哥合も

如此也

あべのおほし　おゝしと読へし

「 (55オ) 」

「 (55ウ) 」

「 (56オ) 」

こせのあふみ イ見 相覧は名乗也
猶以河海ニ委シ コセ 巨勢 或説金岡か子也
或説金岡か事也

からのきをはいして はいしてとは裏うちしてと云儀也
としかげははげしき—— うつほの物語は大なる物也その中
にてとしかけか所はかりをぬきて書たり

正三位 今の世ニはなき双紙也

大君 およいきみとよみ給り

哥 みるめこそ—— 薄雲の御歌也 斎宮ノ御哥とみるは

わるし 花鳥には斎宮の御哥ト見せたり如何ノ

神代の事—— 斎宮にて御座ありし時の事を

神代といへり

過にし—— 花鳥ニ委し

女房のさふらひ—— 臺盤所を云也 いつも祇候

の人を女房の侍と云也

きさいの宮より 悪后

おまし 主人の御座なり

したづくえ けそく同し物也机の足の事也左ハ花足と

書キ右ハ下机と書たり

うへの女房—— 爰には誰ニと名もかゝす

そちの宮 蛸の兵部卿のみやなり源氏の御舎弟也

かみ繪—— むかしは多分絹ニかきし也 河海ニ委し

あさがれいのみさうし 臺所ニつゝきたる所也

花鳥云 朝餉の西の障子にあけて御簾をかけたるへし

┌ (57オ)

┌ (56ウ)

あなたにも—— 中納言の御事也

くはしき日記—— 日記の様にはなくて也

ささなき こゝにてはほめたる詞

親王さうの御こと 兵部卿官也

めてたき朝ほらけなり 面白き様躰也く

うれしく見奉り給ふ 源氏の御心中

佛経 ほとけきやうとよみ給へり プツキヤウト読つへき所也

(以下三行分余白)

(白紙)

(白紙)

袞かせ

卷名は哥并詞を御て号ス 此卷へ源氏卅歳の

事也繪合卷も同年の春ノ事あり

(一行分余白)

東の院つくりいてム 二条院ノ東院也よもきふの卷より

作はしめ給ふ由見ゆ

まところけいし まん所よみ給り物まかなひする

人くなり

しん殿はふたけ給す 寢殿は妻堂の居所也源氏未

其仁なし仍さるやうありてふたけすとあり河海

此説しかるへしと也足仰られき

民口大輔の君に—— あかしの尼君のをぢ也

海つらにかよひて——

水邊にて須まあかし似か

よひ

┌ (59オ)

┌ (57ウ)
┌ (58オ)
┌ (58ウ)

虫損。

たると云り

世中を捨はしめしに—— 中将を捨て受領成也父は大臣

なりし人也 明石ノ入道の身上の事也

君たち

ひそみゐる しほれたる事也

うき木に—— 行ずゑ浮たる心に用申 又は只舟の事迄

身をかへて—— 身をかへたるやうなり

古さとに—— 明石上は京にて生れ給り

さか野の—— かつら嵯峨 各別なり

さて過しはてねはたつ時物うく—— 源氏須ま

にてやり水なとに心とゝめ給し事を思出給也爰まことは

聞分かつし然とも大方如此也 立時ハ須ま廣ひろヲ立わかれ

給ふ時の事也 是晁あきの義也 河海かゑ書まる説悪まシトソ

うちきすかた—— 将束まさせぬ姿

ふた葉の松 姫君の事也

むかし物語にみこの—— 尼君の系図をいはせんとて

かたり給也

ひかれて出給ふ 車なり

かたひら—— 木帳の帷也

とはかり 暫の義

いはんかたなき—— 源氏の御形也

そびやぎ—— ほそ高き事なり 前ま見みつるは些

細たかなりしか今はよき比に成合給ると云る也

┌ (59ウ)

┌ (60オ)

下ノ文字ヲ擦リ消シ裏ヨリ紙ヲ補ウ。

かのとけたりし藏人も—— 此に云るは伊与介か子也

花鳥^ニ良清か事ト云るは誤り也良清に幡^ノ守か子也

解^トたりし也

山のにしきは—— おもしろき体也

海士のさへつり—— 須まあかしの事思し出たり

ずんながる—— 順なり 盃ノ順ニまいる事なり

笛とも—— 笛は吹ものニ惣名なり

朝夕霧も—— 行幸あらは心の晴んといふ心也霧を

心にたとふる也

手によるはかり—— 天下を手ニ取ル心したニ合

浮雲に—— 任雲妬佳月引給り 雲ノ後の月は一段と

さやけき物也 此哥祝ノよまれたり

左大弁—— 此中にて年かさ歎

物のふしとも—— 管絃なとする人歎

ぬぎかけ給ふ 御そなとぬぎてつかはず

我はわれと—— 源の御詞也我は我と面ニおもひ給へと

紫上へをしへ給り 然る時ニ河海ノ説ニ少し替れり

給へとのと文字素然の御説なれば清へし

いそぎ書給は—— あかしのうへへの文也

つみなぎさまに—— 姫君うつくしうてにくまうず

やうもなきと也

ひきゆひ給へ—— 裳^ニ着の腰ゆひ也

わたり項事—— 細ニ御出ある事ハ成かたし

「(60ウ)

「(61オ)

。ものおもはしからぬいか あかしの上の心なり物おもは
しい也

(以下五行分余白)

(白紙)

(白紙)

薄雲

卷名 哥ニよりて号ス 此卷は源氏卅才の冬より次

年の秋までの事あり 入日さす嶺にたな曳うす雲は

物おもふ袖に色やまかへる 此哥にて号せり

つらき所おほく見はてんも—— 後撰十一ニかり初なる所

に待ける女に心かはりにける男のこゝにてはかくひんなき所

なれは心さしはありなからえたちよらぬといへりければ

ところをかへて待けるに見えさりければ女 宿かへてまつ

にも見えす成ぬれはつらきところのおほくもある哉

此引哥後人の引にはあらず式部か引し哥也

びなき ひんなぎと讀給り

はなちかたく 姫君を也

かしこには年へぬれとかゝる人もなきを 紫上ニ御子のおはせ

ぬ事也

女君の御ありさまの—— 紫上の叟を明石上に語り給へり

つるにはかの御心に—— 紫の御心也さなくしては叶まじと

あかし、上のおもはるゝ也

さりとならはかう何ごゝろなき—— おさなく何心も

「——」部分ヲ擦リ消ス。

「——」 (61ウ)
「——」 (52オ)
「——」 (62ウ)

「——」 (63オ)

虫損。

なき程に渡さんと也明石上は一段分別あり

うき事——あかしの心中

おもひやりふかき——尼君分別者也

君の御ために 姫君の事欵

この春よりおワラスふす御くし おふすとはかみをきの支也

たけくまの——松二本ある名所なり母君姫君ニ喩也

あまがつ かもし濁 悪事を是ニおほせて代ニ立る人形ノ事也

とまりつる人——明石上の事を道すから源氏おほす也

つみやうらん 罪や得らん也

うつくしき——紫上の心中

たすき——河海の説如何 たゝ袴着ノ時あるものと知へし

と師説

和秘抄云昔はおさなき者小袖をはきすたすきと云物を着たる也

身のをこたりと——過意也とが也卑下の詞欵

はいわたり——花ちるへ源御出なり

まかり申給ふ 御いとまごい也

をちかた人のなくハこそ はもし清わと清へし

ひきすぐし——すぐれたる支なり或ひきくんじトあり或へ引

ぐしともあり 具しは物のよくとゝのほりたる方也河ノ説 不審

むねつふるゝ—— 姫君京への事也

萬の事をしゆつり—— 此大臣ニ何事も天下の支任せ

給也 御かとは御としよりは—— 天曆の村上ニ比す

給ふふしほどは

┌ (53ウ)

┌ (64オ)

付箋ノドノ部分ニ貼付。

かうけに事よせて—— 豪家なるは人の愁をもいはす

恣なるにこれさもおはせぬと云々或高家

人のつかうまつる—— 世間のわつらひに成事をはし給す

年七十はかりにて—— 夜居也 是は東寺叡山三井此

三ヶ寺より参らるゝ事也

佛一夫 ブツテントヨミ給り

いときなく—— おさなき間は天のゆるしもあり

おとなしく成給ては天のとかめあるにや

よろつの事—— 因果のことはり

かたはしまねふもいとかたはらいたしや 筆者の詞也

打かしこまり給る—— 御門少しるんきむの躰也

かしこき人—— 源氏の御目也

秋の司めし 秋ノ字勿論なれ共是も面白しと也

取わきて思しめしなから 源を也

その御心あらためて—— 桐壺の帝の御心を也

うし車—— 牛車ギンシャの事也

みくしげどの—— 随分の官也これになし給り

ひもとぎ—— 草花どもの咲なり

みじろぎ給ふ——

此すぎ給ひにし—— 御息の事也

もえし煙のむすほゝれ給けん—— 引哥結れもえし

けふりをいかゝせん君たにかけよ長きちきりを 結れけん

とは御息所のおもひの事也 歌の詞をかる御息の心中を

「 (64ウ) 」

「 (65オ) 」

源氏のゝ給り

あはれとたに—— 源氏秋好への御存分なり

君もさば—— さらばなり大事の返事を安くとの給り

つらからんとて—— 曳哥つらからん人のためにはつらからん

つらきはつらき物としらせん

やはらづゝ やうく也

あらざなれ

はしちかうふし給へり むらさきの上也

おもひやりすくなき—— 若かりし時は何の分別もなく

ありし也わかげ也

猶此道はふかきかたの—— 思惟ノふかき也源氏我ト

吾思惟ある支を思召也 花鳥の義少しかはれり

又は此道ヲ子の道とも云り子とは冷泉院の御事也秋好は

冷泉の中宮なればなり

世中をあちきなくうしと—— あかしノ上の心中

ことつけて ことよせて也

とぞ 或物語の本ニかくこそあれと云やうに書きこれ

式部かかきさま也面白しく

(以下六行分余白)

追

けにいにしへはいかはかりの事に定り給へきにかと——

紫上の事を明石上のおもひ給へる心中也 本臺な

とに成給ましき欵成給んか定まらぬやうに聞しか

「 (65ウ)

「 (66オ)

「 (66ウ)

源氏の御心しつまりて本臺ニさたまり給へるハ深キ御宿世也

かすならぬ人のならひきこゆへき—— 明石上卑下

みちすからとまりつる人の心くるしさを—— 源氏の

道すからの御心也 とまりつる人とはあかしの上の支也

太政大臣になり給へき ダイシヤウダイジントヨメリ

たからもの得給へきつかさかうふり 司冠にてはなし

蒙なり紛らはしきによりて無用の事なれとしるし 侍り

僧都はく律師はくそれくに宝をかうむると

云心欵

(以下八行分余白)

(白紙)

(白紙)

槿

卷名哥を以テ号す 此卷ニ源氏卅一九月より冬ノ

末まであり 宮内大臣也 此卷に宮と称する人五人

槿前齋院父桃園式口卿女五宮三宮致仕御方也薄雲

女院等也

女御ノ宮 源の御をば也桐壺のみかとの御妹也

宮たいめんし給て 女五ノ宮なり

いふせき—— 不審の心 是は未審欵如何

三の宮 摂政北ノ かつ 葵上の御母

ありし世はみな—— 人して仰らる齋院の御詞

イフセキ
不審ヲボツカナン
トモラム
其意モアル欵私

┌ (67才)

┌ (67才)

┌ (68才)

┌ (68才)

押紙。筆ハ本行ニ同ジ。

いといたうすくし—— 過とはをとなく成給也

「(69オ)

さるは御位のほとより—— 草子のことは

しなどの風—— ともし濁る一切ノけからハしき支を

吹拂かせなり中臣祓の詞也河海ニくはし周神事ニ此語を 用

いぬゐより吹風也

あさはかならず打敷てたち給ふ 源氏手もちわるくして立

給り

出たまふ 同前

名残ところせきまでれの聞えあへり 人ノ源をほめ申也

けざやかに—— おもてむきのあひしらひ也

うつるあさかほ ^哥 うつろふなり齋院御身上をよみ

ほくゆがむ 方曲 ^{ホニカム} 四方なる物のゆがむ也 給り

つきくしう

多かりけり 人のと云よりけりまで草子

さらがへり 更ニ帰る也立かへる心也こまかへると云も同事也

おぼしたン也

あンべい哉

よろしき事こそ—— よろしきとは中へんなる事

を云也曆ニよろしとあるも吉ニもあらず悪にもあらず中

吉ノ義也 なをさりなる変ニこそとの心也

人のこと 人の言なり

心よはからん人は—— なひかむと也

御せんなど—— 前おふ者の変也

「(70オ)

うちより外のありきは—— 御供の者源氏の仰らるゝ詞也

ひこしろひ 引しろふ也

親のおやとか—— おはをとゝとあるにかゝりて讀り うば也

をしのごひ—— 涙なり

今夜はいとまめやかに—— 槿の御事を源のの給ふ也

かゝりと聞し心がハりを 又異本ニ心ばかりを

よその御返し 文の事也直ニ物の給ぬ支なれば余所な

からの御返答也

丸がれ かもし濁る なみたに髪の丸けたる也

齋院にははかなしこと—— 源爰にて白状し給ふ

けぢめおかしう—— そと降たる雪也 けぢめ見えぬには

あらず姿はく竹は竹トそれくの雪のすかた見ゆる

ほと雪也 今よりはつきてふらなんわか宿のすゝき

をしなみふれるしら雪 此歌の雪などにおなしと

仰らる すすまじきためしに—— 古抄共に委し 三光院

御哥ニ春待し心浅さよ冬の夜のかすまぬ月□匂ふ

梅かゝ 右の心也

わらはげて けもし濁る 童べしい也

ふくつげがれと 含ノ字也 雪団ヲふくやかに大キニなし

度との心なるへし

前齋院 槿の姫君也

今もいみしくぬらし——

夢の後も

「(70ウ)」

「(71オ)」

下ノ文字ニ重ネ書キ。

重ネ書キ。

虫損。

下ノ文字ニ重ネ書キ。

みしろかて 源にても又紫上にてもあるへし

(以下九行分余白)

追

雪のひかりあひたる空こそ—— 此世の事はいふに

及ヌ此世の外まで思ひなくさむとの儀欵

(以下八行分余白)

(白紙)

をと女

歌并詞を以て卷ノ名とせり源御年卅二四ニ及卅四の十月

まての事也 雪ぬの雁とし十四より

乙女子も神さひぬらん天津空袖ふるき世のともよはひへぬ

れは 此卷は五節の舞姫をもて宗トす

(一行分余白)

年かはりて—— うす雲の女院の一周忌なり

まつりの比—— 此賀茂の祭むかしは一段ほんそうと聞え

たり院の御さ敷なと常ニあり

せむじのもとに—— 衣小袖なと多くせんじの所

まて贈らるゝ也

おり／＼ありしか か文字清む

こだいに—— ふるびて也

かの殿にてせさせ給ふ 三条殿なり後々迄こゝニをはせり

御たいめんありて此事—— 源氏と大宮と也

身つからは九重の中に—— 源氏ノ御詞也

せまりたる—— きうくつの心也

┌ (71ウ)

┌ (72オ)
└ (72ウ)

┌ (73オ)

あざなつくる事 河海已下ニ委 夕霧は花ちるの御子分なして
東の院にてせさせ給り

さうぞく 装束

おふなく 謹ム躰也

ひざうに侍り 非常なり

たうぶ 給なり

左中弁 系図の外の人也誰共なし博士たちの人と聞えたり

四五月 よつきいつゝきと讀給へり

れうし 寮試 古抄ニくはし

人のうへに 他人の支ニして也

しれ行 愚痴ニなる事也

大将 夕きりの御おぢや葵上の御兄弟

寮門 大学寮の門也

おろしのゝしる 座を下座へおろす也

兵_ハ卿と 紫上の御父

王女御 かやうによみ給

女は女御といま一ところなん 女御ト又一人をはすと
なり

是か雲るのかり也

大きやう 大饗なり

内のおとゝ参り給て 三条ノ宮へ

めつらしき事なれと ちと不審し給ふ也独して物ニ

も合せす上手ニ成事いかゝとの御不審なり

さいはひに打そへて 明石上ノ事也致仕ノ撰政北方ノ詞なり

かためつらつき かたはらめト句を切てつらつきと讀へし

┌ (73ウ)

┌ (74オ)

とりゆ さうのことを取手つきの事也

琴の聲ならねと—— 孟嘗アウテヨウモシニ遭ニ雍門ニ而泣ト云支あり

其心ハ雍門関と云者琴ヲ能引ク是ヲ聞ハ誰モ泣クと云に孟嘗君

我ハ泣事有マジト云て聞時ニ雍門琴ヲハ不レ引世間の哀不感

定の習イ哀ナル事共語出テさらても哀ナル時分ニ琴ヲ取

出テ引ク孟嘗頓テ涙を落ス此支を曳給り

折レたる事こそ—— すぐにもなき事なり

今かしこにわたし奉んおん—— 乞ちんとりてと也

北のかた 雲井の鴈の継母也

宮の御文 雲ゐのかりの方へ也

御めのと心くるしうみて 宰相ノめのと也

恋しとは—— 夕きりの詞

さもさばかれは—— 同

大納言とのにも—— 雲ゐの鴈の支を也 大納言は

安擦ノ大納言なり 雲井の鴈の母は大納言の北方也

あはれもすこしさむる—— 腹立也

色くに—— 物おもひの色々也

御車三つ—— 雲ゐのかりはや出給也

五節—— 此支公家の大儀也然共源の御上にては何

程の事にもなし

按察 安擦大納言—— 雲ゐのかりのまゝ父

大納言のむすめ 同人

┌ (74ウ)

┌ (75オ)

下ノ文字ヲ擦リ消シ裏カラ紙ヲ補ウ。文字ヲ擦リ消シ表カラ紙ヲ補ウ。

さらび

ものぢかう

其人ならぬ—— わか御子ならぬを参らせ給り其御とかめあり

名残なく打多みて—— 腹立をしなこりなくや

又あひみてやとおもふより—— てもし濁

さとさへうく—— 大宮をさして也 二条院ニこもり

み給也

むへなりけりと思ふ心そはつかしかりける 草子ノこと葉也

内のおとゝの心バへも—— 致仕の大臣也孝ゝとはいへ共と也

こおとゝト同じことく頼ききゆれとこおとゝのおはします

時のやうには安らぬ更共おほきとの給也

たいの御かた 花ちるの上なり東院ニ住給ふ

御馬 愚本ニハあを馬とあるを紹巴なをして御馬と

書たり素然は青馬と讀給り如何／＼

あか色 天子と同色也 第一の官の人の着給ふ色也

又書をとし—— 筆者の詞也

きさきはおほやけに—— 大后也前々の様ニ大后の

仰らるゝ事叶ぬと也

よまち—— 二町四方也

式部卿宮 紫上の父なり

たいのうへ 紫のうへ也

としみ 賀ノ事也 晁ニ委し

わか家までは—— 我御家までの扶助ニハあらねとも也

┌ (75ウ)

┌ (76オ)

北のかたは—— 紫上の継母

御前四位五位かちにて ござんとよめり

侍従のきみ 夕霧なり

追

けさやかなる御もてなし—— をとなしくなり

給ひたる様躰か 実々しきもやう欵

博士とも中々おくしぬへし—— つれなく思なして——

憚て夕霧の御座には所を置へき事なれ共さやうもよて

なさぬとなり

よしふさのおとよ 忠仁公の御夏也清和の御祖父也

(以下四行分余白)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

(一行分余白)

元龜三九月勝竜寺之城にて藤孝御所望にて紹巴講尺あり

未座に侍て聴聞

未通女ト書之未通女といふ事也十二三はかりの童女なるへし其

已下は勿論也いまた嫁せぬ女也文章ノ意よく叶り

(一行分余白)

大殿—— 源の御事也

史記のかたき巻く 讀にくきまきく也

つましるし残す 不審のところニ爪にてしるしをして

┌ (76ウ)

┌ (77オ)

┌ (77ウ)

┌ (78オ)

┌ (78ウ)

重不書キ。

置事也

世のひがもの つくろはぬ者もありめに物いふ者也
すげなくて すねくしき心也

王女御 王孫の女御

按察の大納言—— 後の親とある此大納言也 母方ニ

限す父かたをも後のおやと云へし

物の上手の後には—— 明石入道は比巴の上手也延喜よりの血脉也

ちうさす支—— 比巴を引に左の手の指のうけおしの事也

りちのしらへ 呂律の律也 唐には打返て律呂と云

さいなみ給ふ しかり給也

そこたちは めんくはなと云やうなる事也

雲井の鴈も吾ごとや かく讀給ふニより姫君を雲の鴈と号ス

あからさま 不慮也

紅の涙にふかき—— いひしほるへき いひふする心也

霜こほりうたて—— 夕霧の御歌はいつれもこは

くしき也学道の哥はかやうなるもの也今の代にも物知

の哥は凡こはくしきと也

わか心さすしめを—— 標とは領する心也 木ノ標とよむ字也

こゝしう 大やうなる事也

ひかげ ひかけの糸の支拵やうありて右ノ肩ニかけて二

筋さぐる也又は冠の角にも懸るなり 神代ニかつらぎにて

神の蘿葛をひかけの糸ニ用て懸給る也 蘿ノ字サカリゴケ

とよめり

「(79オ)

「(79ウ)

あをずりのかみ—— 舞妓の装束ノ日は青摺ノ唐衣也

┌ (80オ)

青摺は小忌の事也をみ衣は白キ布をはりてそれニ山藍イロと云
物を以てかた木の葉を紋に青ク摺付ける也是ニよせて青摺ノ
紙に書る也

ましが 你がなり

はまゆふのへたて—— うすき隔をいふ也浦濱に生る物也

うすきもの也故ニいふ又哥に濱ゆふの百重とよめりそれは其は
薄していくへも重りたる支也 三熊野ニあり

及第の人—— 是を進士の及第ト云也第ノ字はふたとよめり

経なとに巻第一巻第二トあるもふだと云。あり

くたに 岩藤ともいへり 牡丹共云り説々多し又は苔とも云り

猶 古抄共ニあり

(白紙)

┌ (80ウ)

(白紙)

┌ (81オ)

玉鬘

歌をもて巻の名とせり 恋わたる身はそれなからイれと

玉かつらいかなるすちを尋ぎぬらん 此巻源氏卅五

此巻は玉鬘の列傳と見へし末摘の巻の書やうニ

似たり

(一行分空白)

あらましかは—— 夕顔上の支也

たいの御かた 紫上也

心の中には—— 右近か心中なり

こ君—— 夕かほの御事也 君清へし
はゝ君—— 玉かつらの母君也是夕顔上也此段御
めのとの心也このめのと西京ゝゐたり

ちゝ君—— 頭中将也

たつね問たまはゝ—— 父君の御尋あらは夕かほの事何
と答んとの思惟也

又よくも—— 父の玉鬘をまだよくも馴給ぬに留メ置ん
も心もとなき也又御子とはしりなから我らに連てつくし
へ下れとは仰らるましと也

いとうつくしう—— 玉かつらの御事

しつらひなき舟に ぞさうなる舟なり

ゆゝし いま／＼しき也

心わかうをはせし物を—— 夕顔上の事なるへし

おはせましかは—— 夕顔上の事を云也

ふたりさしむかひて—— 花鳥の説わるし河海の説

しかるへし晁ゝ委し 河海ノ説は小貳夫婦さし向て也

両首ノ哥も夫婦の歌となり

おなしさまなる女なとそひて—— 也足軒紹巴への点取ゝ

ものゝけはなき世のゝちも猶そひて右之意と御物語あり

心は明白ニ聞えたり巴聞得すや有けん点はなかりしと仰らる
小貳任はてゝ 常は四か年ノ物也筑紫などは遠国の故ニ五
か年也

はふれ給んと

「(82オ)

「(82ウ)

ゐてたてまつらん 將此字なり

さるへき人に—— 父君ニ也

三人 ひとりたりと誦へし

きゝついつゝ 聞つぎつゝ也 聞傳ふる也聞次なり

たれもく—— 誰々の云懸るをも同心せぬ也

ねんさう 年三と書り 正五九月の祈禱なり一年ニ三度

ぞうひろく 子孫ひろく也類也 曾ノ字なり

さるへきにてこそはかゝる—— さ有ふする縁にてこそは

此國へをはずらめと云心也

何のたけき——

まけじだましぬ 逆めに入やうなる心也

さるものの中に—— さうあるものゝ中ニ也 監か事なるへし

三十はかりなるおとこの 監か事也

けさう人は—— 監か詞にてはなし只その時ノ事を

書たる也

こ小貳 古也

いかうに 一向ニなり

わたくしの君—— 私の主ニと也

すやつばら しやつはらと讀給へり

わか君をは後の位におとしたてまつらじ物をやなと——

后にもおとらすまじの心也 監か詞也

いかゝはかくの給を—— 祖母おとゝのことは也

さらになおほし—— 監か詞なり

「 (83オ)

「 (83ウ)

「 (84オ)

きのはて—— 田舎などにはかやうの事忌也此月すきての
夏ニせんと云のかるゝ也

をりていく—— 監かへりさまニ

此和哥 わかと讀給り

つかうまつりたりと—— 慢したり

ゆくりかに 不意也 おもはずに也

さはいへと—— 女^ムともに讀すれとまろはまして物も覺

すとてゐたると云^ム処ニかかりて見るへし

ときゝかす 説聞かする也

たみにはあらず 士民ニはあらずと也 監かことは也田舎

人は今もか様の事あり

たへすや—— 歌の出来ぬ事也

此豊後のすけをせむれハ—— 玉鬘ノ君兵部ノ君姉

御許祖母おとゝ三条そのほか内の人ノなるへし

おなし心ならずと中たかひにけり 兄弟共のかたから

豊後の介ニ中たかひ懸る也

大夫監は—— 是は前ノ注なり

うき事^哥に—— ひゝきのなとも胸のさはきによりて何

ならぬと也

豊後ノすけあはれに—— 胡の地の妻子とうたふ

なるへし

けにとそみな打すてゝける—— けにと云よりなかれ

いふ^ニまて能^ニ心をやりて見侍へし大方^ニては聞えずぬと

「(84ウ)

「(85オ)

すこし心のどまりて　ともし濁也　今までは取乱して

何事も打忘しか今安堵してかなしき事も思はるゝ

と也尤ゝ是は誰身ノ上ニもある事也

たゝ一ところの——　玉鬘ノ君

此人——　同人

おはすらん所にさそひ給へ　来世へなり共と也　哀ふかし

三四人^{サウシヤリ}　三人^{ミタリ}　かやうニよむへし

つぼさうぞく　河海ニアリ　市め笠きて中ゆひたる姿也

ひすましめくもの

(一行分空白)

ぜじやう　幕のやうなるもの也　又はつゐたち障子の様

なる物共云り　木丁ニ似たるもの共云り　何れニ物の隔也

れいならひにければやすく——　右近は度くまうする

なり　むかしは事外に人の信してまいる所と聞えたり

臺なとうち合で——　へたくにて都合せず

兵藤太　とは兵部ノ官にて藤原氏なる人の第一番めの

子の事也昔はか様ニ名を付る類多し太は太郎也一男也

うへはおはしますや　夕顔の上の御事也

まつおとどはおはすや　小貳か妻也玉鬘ノめのと也

またゝきて　消さうにて消ぬなりともし火のまたゝくと

云もおなし儀也　死さうにて死ぬ也

もろともによと——　入堂の支也

のし　のしをかけたるものゝ事也　花鳥ニ委

┌
(85ウ)

└
(86オ)

あしなれたる人—— 右近か事なり細々まうつる人也

足なれたると云理よく叶へり イ本ニ少しなれたる人ともあり

此君をもてわつらひ—— たま髣の御事也

この御しはまたふかゝらねはにや—— 筑紫人は今ニ始めて

まうてたれば祈りノ師と頼たるもいまた志の浅きを深

からぬとは云也花鳥此分也也足の御説同之瞬花の説は相違如何々々

此御師いまた宿老ならぬ心ニ用たり

かくあやしき—— 右近か詞也

あなつらはしく—— むさとしたる変などをしかけてせむ

変也大殿の御威光ニかゝりてさ様なる事はいさゝかもなきとの心也

申けり 佛ニ申也

大貳のみたちの上 大貳の妻也 大貳は筑紫九ヶ國の司也

みあかし文 願文也

いのり申侍ししるし—— 法師自慢する也

おほえぬ—— 右近か心中

とのゝ上—— むらさきの上也 花鳥

又おひ出給ふ姫きみ 明石ノひめ君 花鳥

かうやつれ給る—— あかしの姫君はかしつきつ

ろひ給へはさも有へきニ此たまかつらのうへやつれ給るか

おとるましくみゆるは有かたき事と也

当代の御母きさき—— 薄雲也 此姫君とは

あかしのひめ君也 うへのみかたちは 紫上

「(86ウ)

「(87オ)

おひ人 小貳の後家なるへし

うしろむきて—— 玉鬘也

いかてかくをひ出—— よくそだてあげ給とおとよを

ほめたり

は、君 夕かほの上也

是はけたかく—— 玉かつらの事也

秋風谷より吹のほり—— 面白き為体なりこれを以て

後柏原御製 吹のほる谷かせ見えて初せ山夕のかねに雲の

いづとても—— 出るとても也 京にての宿と互かゝよくあるし

約するなり

おもたゝしく—— 面目らしひ也

うへに聞せ—— 紫上ニなり 紫上のちに聞召ては隔心に

おほさん二ところ一所に御座ある一所にて申とおもへる也分別

ある右近也

すこしほとへて—— 此程見すして今又みれば一かとうつ

くしきとなり

かの人をとらしと—— 玉鬘也紫上にをとらしとみし也

さいはゐの—— 御果報めてたくしていかにもつくろひ

たて、御座あるとやつれはてをはずとはさやうの事ニても

替るへき態也と見合ス

今はおほやけに——

しゐて高人ニ成給へは政をも人ニゆつりて

させ給ふなり

頭ノ君は御子多し始ておはしたり共何とか有ん

┌ (88オ)

┌ (87ウ)

下ニ擦り消シノ痕有リ。

挿入指定ノ線有リ。

と也源氏には姫君稀なり 我はかくさうくしきとあるは

この心なり

よし心しり—— 実父 = 成てかく源氏の給ふ也

おほえぬ所より—— 実子と仰れんと也

くさはひ 種なり

御心になむ 右近か詞也御意次第ト云心なり

いたつらに過ものし—— 夕かほの御事也

かのすゑつむ花の—— おもふ = たかひてあしかりしをおもひ

出し給也

しつみて—— 田中^舎にてそたちし人なれば心もとなくて

まつ文のやう躰もみんとおほす也

見ぐり—— 水草なり 絶ぬ物也 くもし清

御さうぞく人々のれうなんと—— 人くにも 給る也

うへにもかたらひ—— 紫上にも御談合なり

みくしげとの—— 源氏御私のみくしげとの也衣裳を調ル人也

数ならぬ—— 数ならぬ身とうけたる詞也うきにしも

とはうき所^ニありつると也 泥也

手ははかなだちて—— 後まで此御手はよくもなかりしと

聞えたり然共よしめきたる歎

み心おちるにけり 又哥已下を御覽ありて安堵し給りすゑ

つむのゆふかひなかりしをと前の詞にあるに御心おちるにけり

とは首尾相応の書さま也

さふらふ人のつらにや—— 中宮につかうまつる人に

┌ (89オ)

┌ (88ウ)

さきれん。也

上にも今そ——むかしの夕顔の支を紫上へ初てかたり

給也 私心しり給ぬ人と前ノ詞ニあるに首尾叶ヘリ

かく御心に——紫上うらみ給り

わりなしや——源の御詞なり

おもはぬ中も——思ふ中も思ぬ中もと云心あり畧して云り

又ことほりそ——よき姫君を持給へは北のおとゝをめさまし
あかしの上也

とおほすもことはり也

十一月 十月 しもつきかみな月と讀給へり

あはれとおもひし人の 夕顔の上の事を花ちるへ語り給也

女になるまで——おとなになるまでといふ心也

中將を——夕霧をあつけ申ニよくそだて給トほめ給り

夕きり中將の由こゝに見えたり

おなしごと——夕きりと同じ如クにと也

姫きみの一ところ——明石ノひめ君也一所トハ一人也

かの親なりし——源氏ノ御詞なり

つきくしく 花ちるのことは

おとゝの君わたり——源東ノ御かたへ也

しつみ給へりしを——源ノ御ことは也いらへをよくし

給りと思す

右近にあるへき——その事共仰付られて帰り給り

紫上ノ御方へかへり給也

うへにもかたり——紫上へ語り給ふ

┌ (90才)

┌ (89ウ)

兵部卿の宮 源氏の御舎弟也

うるはしだちて—— 実くしきかほもち也

くさはひ 種なり 花鳥ニ委

人の心はげまさん也—— 玉鬘ニ人のこゝろを懸ん事を

先におほすはあやしと也

君をこそさやうに—— 玉鬘のやうニせん物をと紫上

源氏のされて仰らるゝ也

中将の君にも 夕きり也 源の御詞

今そ三条も—— こゝにて三条か合点したる也

てうしたるも—— 調し也よくたちぬひ調へたる也

こなたにせさせ給へるも みくしけとのにてしたるをも紫ノ

うへの御方ニさせられたるも取出して見給り

とうで 取出て也

染つけ そめものゝ事也

うち殿 衣裳を打人なりむかしは打事ニ精を入たると聞

こきうすき—— をし出してこきうすきとはかり云んは紅ト紫ニ

かきるなり余はその色をいふへし

とりぐしつゝ—— うちきの袴の何のかのとて一人くノ手前

くニ一具つゝ也

き給ん—— 紫上の詞也

つれなくて—— 知ぬかほをして也

鏡にては—— 證明の意也それくニ似合くを目き

證明人にならん事は如何くと紫の上の仰らるゝ也

〔(90ウ)〕

〔(91オ)〕

あさ花田　うすあさぎ也

こきかいねり　紅の也前ニ注ス是も紅とは云すしてこきと

斗あり

柳色のおり物の——一向に似合ぬを御送りあり此故ニ

をかしとおほしてみつから笑ひ給ふ也　いかに花やかなる

衣裳なれば也

御れうニある——源氏の御めし用ニあるを也

あるへき事はたかへ給す　むかしの物共たかへす持給ふ也

よもきふの巻にも此心を書たり

うつほ——かさねもなく只一つ給りたまふ也

いといたくほうゑみて　源氏

うへ何事ならんと　紫上也

みけしき——源の御き色也

まかてぬ　使退出なるへし

さらに一すちに——是からは歌よむやうを源ノの給ふ也

ゆるぎ給ぬ——哥の心の動らぬ作なり

かうや帯　先にはかんや帯と讀給り如何何れもくるし

たりしか　か様なるかもし所ニあり濁りて読給ふ時からぬもあり

又清て読給ふ時も有也

うへいとまめやかに——紫上也多御詞なり

姫君にも——明石の姫君也　花鳥に委

こゝに物の中——紫上ノ詞也　ものゝ中ニ置つるか查のさす也

姫きみの御かくもん——源氏の御言葉

「(91ウ)

「(92オ)

女はたてゝ—— あまりものニ数奇過たるはあしきと也

何事もいとつきなからん—— 又不調法なるも口おし早竟は

たゝ心もちが肝要と也

いと心やすけなり 返哥をやすくとし給へり

(以下十行分余白)

追

返しやりてん袖をぬらして 給はる衣をかへし

まいらせむと恨る也

いとをしけれと又宿りかへむもさまあしく—— 宿のあるし

をいたはりていとをしけれと云也

右近か数にも侍らすいかてか—— 是は初せにての事を

京にて云也右近かわかゝすならぬ身さへ見付られ申事は

佛神の御利生そといへり

からの色紙かうはしきかうに入しめつゝ——

かうばしき香に焼しめたる支欵入の字不審なれ共別の

子細有ましき也 後ニ聞 香の唐様などやうの

物ニ入置たる也 此説よしとそ

今すこしさしはなれえんなるへきを—— 花ちるは

罪も疎々しければ怨みらるへきをさもなくうるはしく

もてなし給ふと也

(以下七行分余白)

(白紙)

胡蝶

┌ (92ウ)

└ (93オ)

┌ (93ウ)

┌ (94オ)

└ (94ウ)

虫喰。判読困難。

以哥并詞卷の名とせり初ね同し年事也是は三月
四月の事をするせり 堅の并也 源卅六才なり

こ躰にもさそはれなまし心有て八重山吹をへたてざりせば

ほかの里には—— 花鳥ニくわし 是は殿の内なる

人の心なるへし

からめひたる舟—— 一本にそらめひたる共あり

春まつその—— 紫上の心

ちいさき山をへたての関に—— 中宮と紫上との間

の隔也

こなたの若き女房—— 紫上かたの女房也

竜頭鷄首 文撰ニ首を舟とも書たり

ほかにさかり過たる桜も—— 外より見る人の心なる

へし殿中の人の心には非ず

ほそきえたを——

哥
こやなにたてる 名ニ也

人の御心ゆくへき手のかきりをつくさせ給ふ

此詞朱にてそばにかた假名にてかく是三条家ニかきる也

そらみたれして そらごとにはれたる心也

なよひさうとき—— 風流かましくたはれたる也

ミど経 御讀きやうとみよ給り

ひの御よそひ 晝花の説よし 秘事かましくいへとも

別の事なし日の御のそひとは日るの御衣裳なり

いつくしき御ありさまも 敵重の義也

虫損。

下ニ擦り消シノ痕アリ。

虫損。

「 (95ウ) 」

「 (95オ) 」

花かめ かもし清給り

ききうかう 行香

花にをれつゝ—— 我もをる也

さへき

白き一かさね 細長なるへし

こしぎし—— 卷絹一疋なり

すくれたる—— 草子也 御らうとは上臈なり

さやうの事くはしければ—— 草子也

にしのたいの御かた 玉かつら也

いとらうあり らうくじい也 いかにもあらんと

讀きりてけしきいとらうありと讀へし

かどめいたるところ—— きつとしたる心の事也

(一行分空白)

くじののたうれ—— くじとは孔子也 此議早竟は実くしき

善人も誤はあるものその心なり実ほうなる鬚くろも

恋ノ路ニハ心まよひ給ふとの義也

びんなひことなどし出たる—— 男は誰もひんなき事

しかくるもの也それはおとこのとがに非す女のとかそと

源しのの給なり御教訓なり

宮大将 匂宮 鬚黒兩人也

御ありさまにたかへり—— 玉かつら廿はかり也而れは

ものゝ心しらぬやうなるも似合ましいと也

人の有さまをみしり—— やかて紫上をはしめ歴く

「 (96ウ) 」

「 (96オ) 」

虫損。

虫損。

⑩人の様体を玉鬘のみしり給ふ也

あかぬ所なく 不足なき也 十分なり

さらに人の—— 右近か詞也

内のおほいとどの中將—— かしは木也是岩もる中

將なり

しふねくとよめて イ本とらで 文を使のをきて帰る也

いとらうたき—— 源氏の詞也

かうなにやかやと—— 同事

こゝら年へたる御中に—— 別腹の兄弟たちの事也

めしうと 今ノ代ニ手かけものなとゞいふやうなる事なり

めしと共よむへし 又めしつと共讀へし是は 後陽成

院の勅説ト也 とが人をめしうとゞ云事は近代也むかしは

なき支也

いとわか／＼しきも—— をさなきものゝやうに返答を

せさらんも如何ト玉鬘の心ニおもひ給ふ

後のをそれと—— のちの親也

おほすさまの事は—— けさう支也源の心

わたりたまふ かへり給也

うらめしかべひ事そかし

いざり出て 礼儀の心也玉鬘出らるゝ

中／＼にこそ—— 實父ニ逢ンも中／＼と也

なとたのもしけ—— 源のこと葉也

ふとむかしおもひ出らるゝ—— 夕かほの上の事也

┌ (97ウ)

┌ (97オ)

虫損。

虫損。

虫損。

いとかうしもおほえ給ぬと—— 夕顔上ニ似ぬ事也
中将のさらに昔さまの—— 夕霧の葵上ニ似ぬ事也

いとさかしらなる—— 草子
うけたまはりぬ—— 文章也

かくてことの心しれる人は—— 虚父実父の事を
しる人の支也

かたよりにほの聞て 一方むきに聞事也 みてこそがた
よりに此九字ある本もあり又無本もあり

(以下十行分余白)

追

双調ふきてうへに待とる 地下堂上。 地下ハ白洲ニ

居て先始ルそのうち堂上へうへにおはして絃を加へらるゝ

花かめ かもし清濁如何と尋給へは素然御答へすみて荒へ

きたれりさりなから濁てよかるへき事也と仰
らる

ぎやうがうの人く 香をたく役人の事也 行香

次手ニ曰ハク みやうかうとは別の支なしたゝよき香の事也

紛らはしき事也

(以下三行分余白)

(白紙)

┌ (99 オ)
└ (99 ウ)

┌ (98 オ)
└ (98 ウ)

虫損。

左下ニ「実践女子大学図書館印」
(朱単辺長方印)「常磐松文庫」
印「(朱単辺長方角印)ヲ捺ス。
左下ニ「一月明荘」(朱単辺長方
角印)ヲ捺ス。

